

通類編

第十年八月號

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十年七月廿一日發行(每月一回)
昭和十年八月廿七日發行(每月一回)
昭和十年八月廿七日發行(每月一回)
昭和十年八月廿七日發行(每月一回)

齊藤勇
國畫



今夏は……
是非オリヂナル香水
の清々しいよい
薫りで……
御愉快にお過ごし
を願ひます！

待優大若用愛待
水香料原……つ保く永のり香いよ・
オリヂナル香水
一瓶御買上毎に
もう一本
進呈！
水香ルナヂリオ

お買上のオリヂナル香水の空函を本舗景品係に
御送り下されば、同額同質のオリヂナル香水を
進呈致します

●空函の送り方
(空函へ送料用として
大三錢切手四枚・中同三枚・小同二
枚を添へて封書で御郵送下さい)

東京市日本橋區水天宮前

本舗 株式会社 安藤井筒堂



風味必ず御氣に召す

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を！

支店

大阪支店

心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町

京都支店

木屋町ドンブリ橋





東側

◆道頓堀・第七輯・八月號◆

★繪 口★

回納涼歌舞伎。中座。鎌倉三代記高綱延若。三浦之助梅玉。時姫魁車。「三笠と世之介」世之介長三郎。三笠扇雀。妹女郎幾代芳子。太左衛門福助。蜻蛉三人旅。格さん魁車。播州舞臺面。助さん延若。藝備國境。瀬戸。内海舞臺面。黄門梅玉。黄門劇。各場面集。鎌三舞臺面。稽古場。スナップ。回歌舞伎座。五郎劇。「共通點」失業者松本良吉五郎。「帆影」女房おつな五郎。敵艦見ゆ。勇士沖花五郎舞臺面。記念撮影。「共通點」帆影。「似ぶ草」舞臺面。回角座。辻野良一奮闘劇。當麻事件。西郡小彌太辻野。家令古山小笠原。姿露野令剛。「無言の鞭」舞臺面。「鼠小僧十六むさし」鼠小僧辻野。娘おしの福岡。

★扉

.....長谷川小信氏所藏錦畫

◆鎌三劇談◆

鎌三の思ひ出 高安吸江 (二)

明治大正昭和三代記 高谷伸 (四)

◆三浦之助の思ひ出◆

あの時の三浦之助 高原慶三 (七)

私と三浦之助 中村扇雀 (八)

梅玉・魁車・延若
ト明才に寄す

..... A 菱田正男 (一〇)



三笠と世之介

..... B 森ほのほ (三)
 C 桂田曉香 (三)
 D 渥佐満國 (四)
 食満南北 (六)

盛巡夏地業讀物
 話の編輯

突差の十分間 曾我廻家五郎 (六)
 土佐の高知 都築文男 (九)
 或る夜の出来事 曾我廻家小次郎 (三)

七月各座觀劇記

七月芝居抄 西尾福三郎 (四)

菊五郎の三役 大橋孝一郎 (五)

古典座を觀る 堀川哲 (六)

鎌倉三代記解題 世話垣頓文 (七)

家庭劇補強工作論 西田眞三郎 (八)

新人作家論 那津九一翁 (六)

續「蜻蛉三人旅」芝居物語 中座 (三)

六號ニユース 大槻たもつ (四)

漫畫夏芝居超軟扇子 (九)

八月の芝居案内 (四)

編輯後記 村上勝 (四)

日刊工業新聞

本社 大阪中之島五丁目

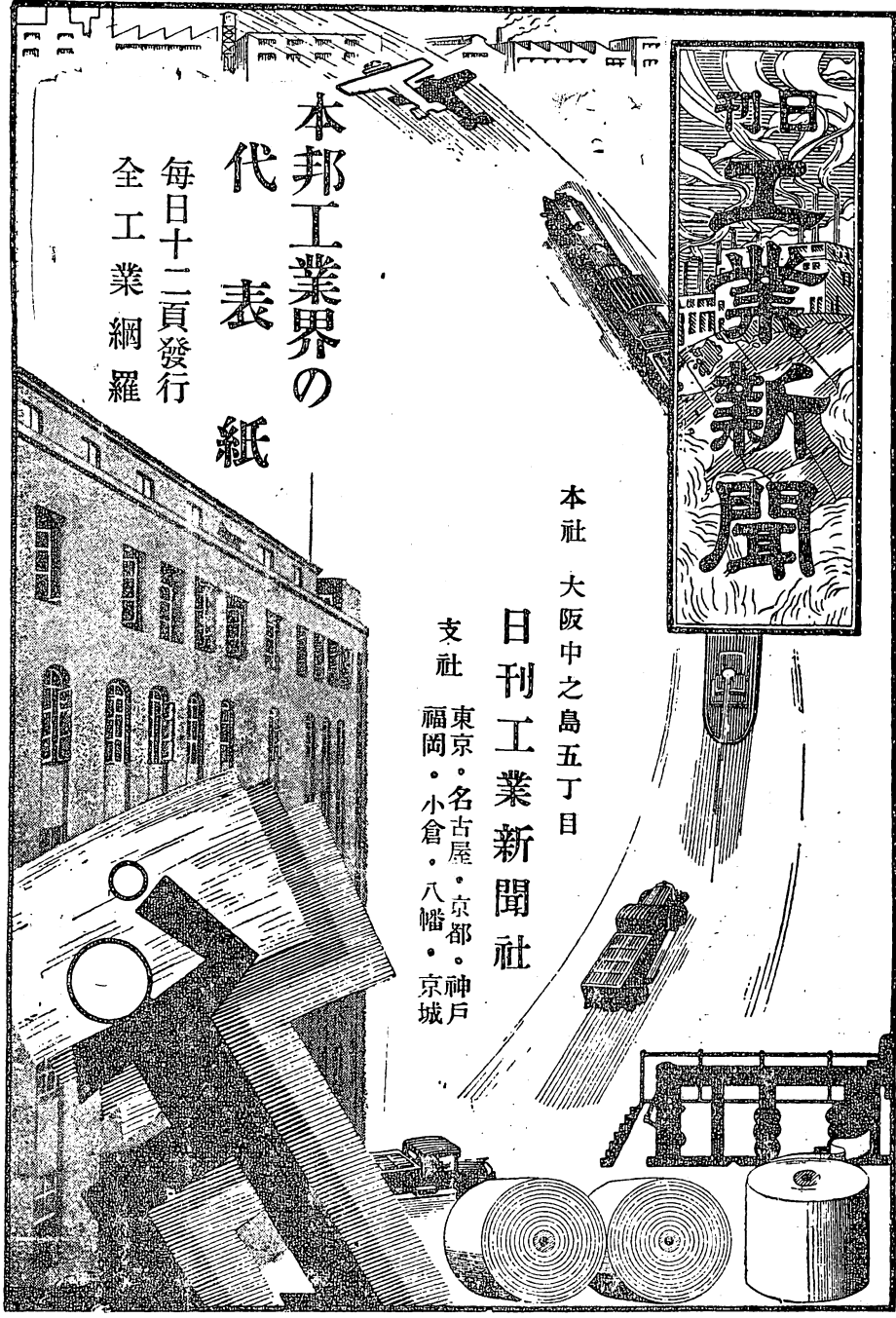
日刊工業新聞社

支社 東京・名古屋・京都・神戸
福岡・小倉・八幡・京城

本邦工業界の

代表紙

毎日十二頁發行
全工業網羅



暑
中
御
伺



中外商業
新報社經營

大
阪
北
濱

實益記事滿載！
趣味讀物充溢！



夕刊四頁・一部金貳錢

暑
中
御
伺

大阪
商業
新報

社
長
越
智
南
海

電話 大阪市北區空町一丁目
二五八〇番

支店 東京・神戶・奈良



本社 大阪市北區堂島濱通四丁目三番地
 支社 東京市京橋區銀座通七丁目五番地

株式會社 夕刊大阪新聞社

日本工業新聞社
 日本染織新聞社



大正四年新聞

本誌が獨り夕刊新聞として覇を爲すに止まらず全日本の新聞界に於ても鬱然として一大王國の觀があるのは單に面白いからのみではない、讀めば必らず胸臆を震撼させずには居ない感激と正義の文字で紙面が盛上つて居るからである。人情風俗の活映畫。財界の波、商機の動きには正確の羅針盤、讀みたい新聞、讀まねばならぬ新聞、讀まずには居られぬ新聞。……

代 閱 新
 錢 貳 部 一
 錢 十 五 月 一
 錢 五 十 稅 郵

料 告 廣
 圓 壹 行 一 欄 通 普
 圓 貳 行 一 欄 別 特

所 行 發
 濱 北 區 東 市 阪 大
 地 番 七 目 丁 四
 社 聞 新 日 日 阪 大

局 本 話 電
 1101・1102・1103
 1104・1800・2600
 7 0 ・ 7 1
 用 送 發 付 受 間 夜
 1101

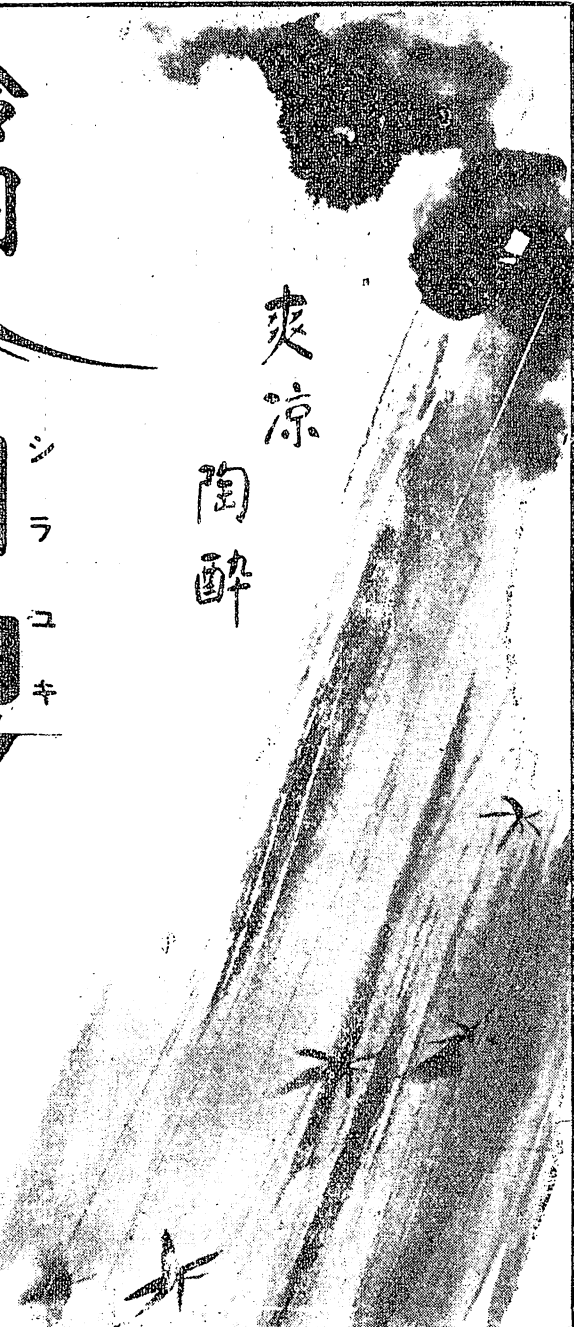
冷用
銘酒

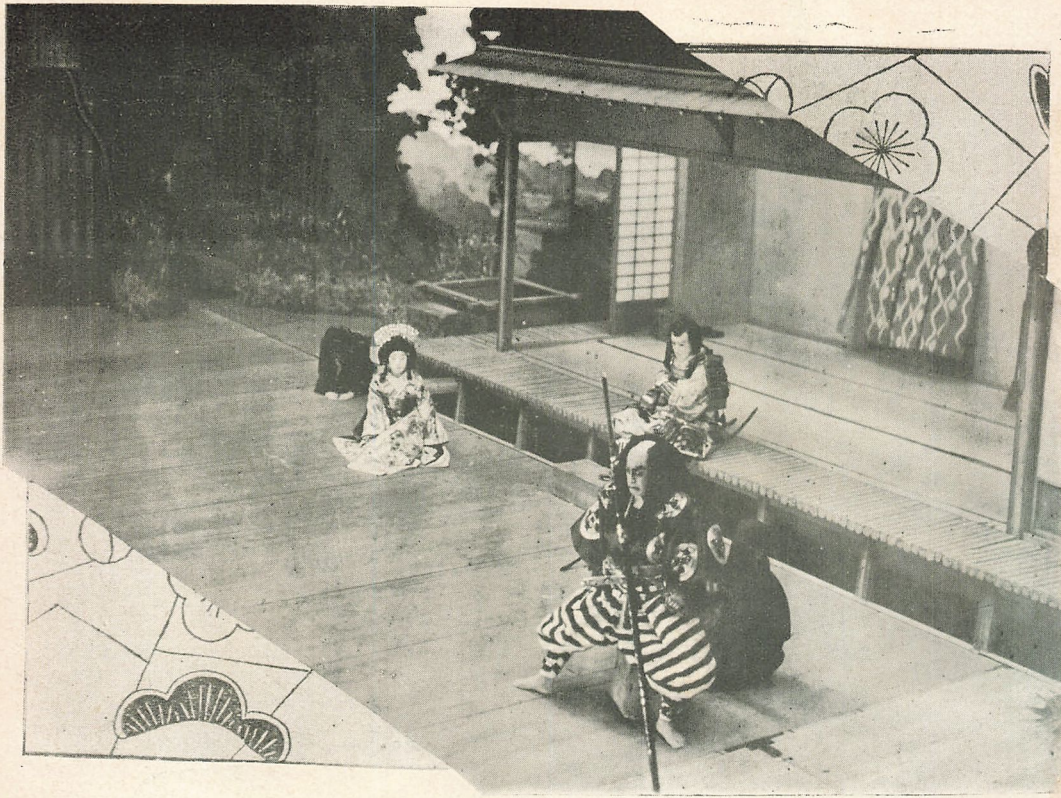
爽涼

陶醉

シ
ラ
ユ
キ
白雪

振津伊丹灘
小西酒造株式會社





名トリオの「鎌三」舞臺面

中座納涼歌舞伎

八月一日撮影

絹川村閑居

佐々木高綱

三浦之助義村

北條時姫

延

梅

魁

若

玉

車

鎌倉三代記

名大坂の守り勇將
 おこまがもくもく
 三人の出會ひ
 丁度候に夏の夜語



上中下
 三時佐
 浦之々
 助之木

新作舞踊篇

「三笠と世之介」



上から

世之介 長三郎

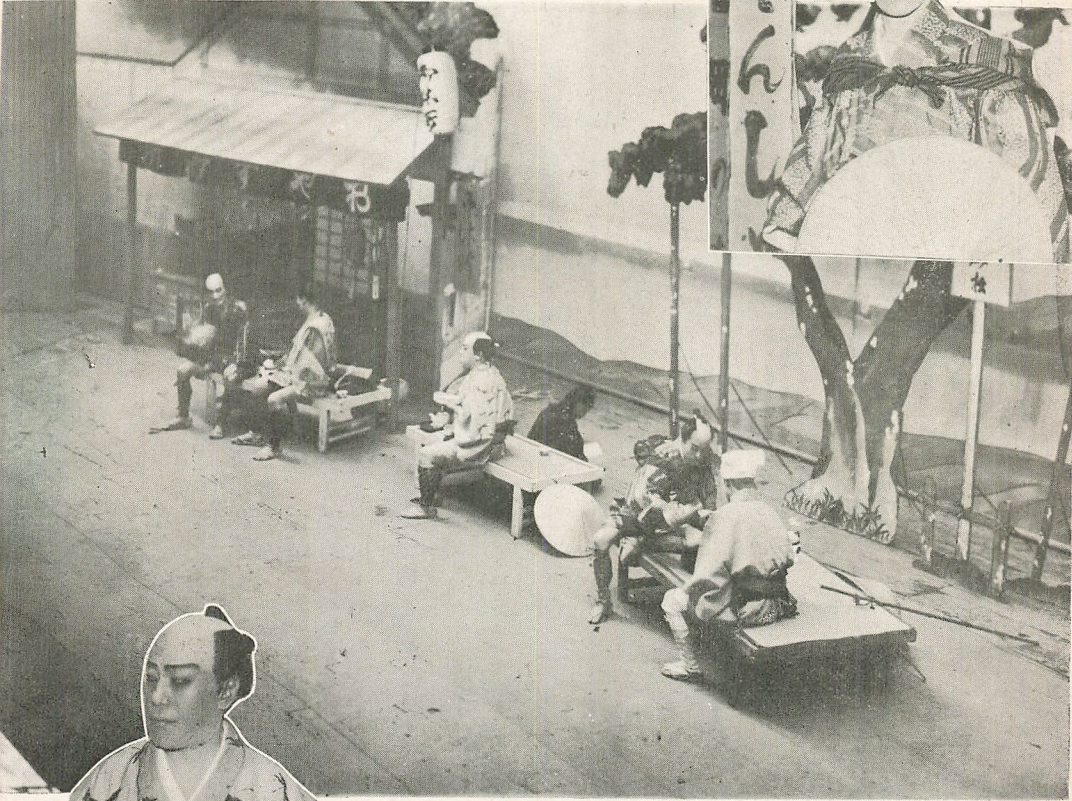
三笠 扇雀

妹女郎幾代 芳子

太左衛門 福助



座中の月8



車	魁	ん	さ	格	上
		松	の	砂	高
面	臺	舞		州	播
若	延	ん	さ	助	下

夏と共飛に出たし「黄門劇」續篇



上 藝 備 國 境 の 場

下 瀬 戸 内 海 夜 霧 の 場

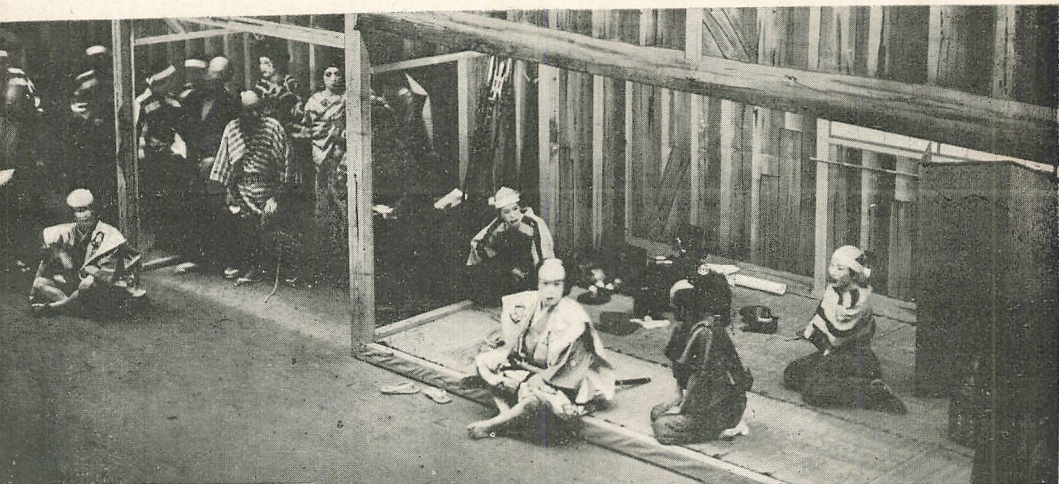
水
戸
黄
門

梅

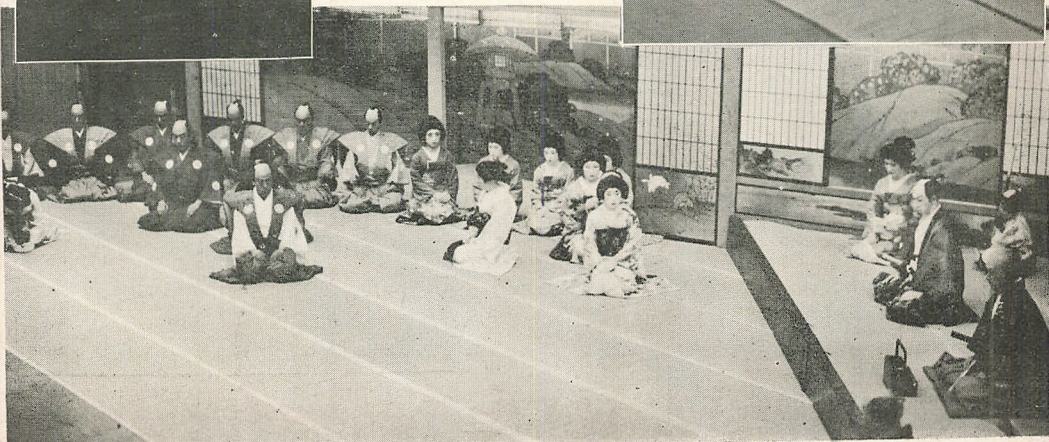
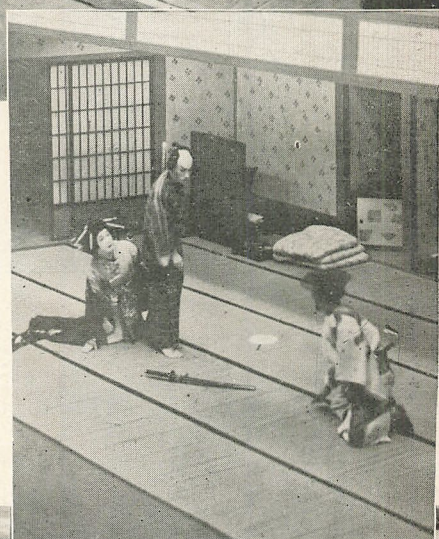
玉



興 趣 百 續 ! 蜻 蛉 三 人 旅 全 十 二 場



中座「黃門劇」
8 月
各場面集





松竹衣裳部

小道具・小裂 貸衣裳

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

其他一般の衣裳多に不拘御利用
さし御來客の御相談に應じ便利
よく取り計らひ致す……

本店
東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話 戎 五 六 三 四 番
東京市淺草區駒形町二十三番地
電話 淺草 六 六 六 一 番

新阪 興妻 千惠 千藏 萬壽 郎 三郎 大傑 星作

嵐寛寿郎の主演

山田五十鈴 特別出演
月形龍之介 出演
原作、群司次郎 監督、伊藤大輔

嵐寛 又右衛門

新興東西、第一映畫
松竹、千恵藏プロ
合同超特作映畫

片岡千恵藏の主演

「三ツ角段平」 大倉千代子、瀬川路三郎、特別出演

股旅新八景

千恵プロ、新興京都
超特作、夏の映畫
監督、振津嵐狹
原作、長谷川伸

阪東妻三郎の主演

阪東橋之助、杉山昌三九、河津清三郎、久松三津枝、小金井勝原、駒子、高津摩子、特別出演

新納鶴子代

監督、マキノ正博
脚色、鏡二郎
新興東西、寛プロ
松竹、第一映畫合同
超大作映畫

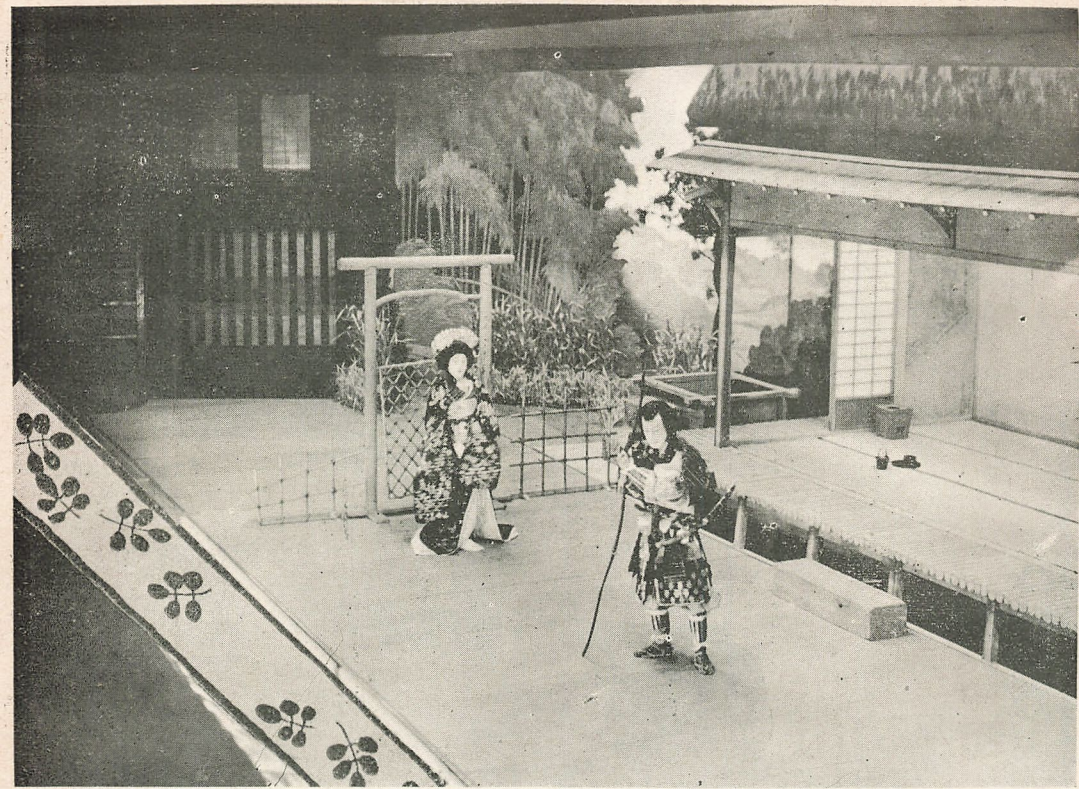
新 興 妻 千 惠 千 藏 萬 壽 郎 三 郎 大 傑 星 作 社 支 阪 大 社 會 式 株 マ ネ キ 興 新

金鶏印 罐詰 二大製品

- 1. 純良精選の牛肉
で御壺います
- 1. 不意の御來客に
- 1. 御酒ビールの御友に
- 1. キャンピングに
- 1. ハイキングに
- 1. 各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1. キンケイ印を御指定下さ
い



洋酒・飲料水・罐詰
株式会社 横山商店
大阪東區豊後町三



上 鎌三 舞臺面
下 稽古場 斯納ツ

延之助・芳 子・延二・郎 三延



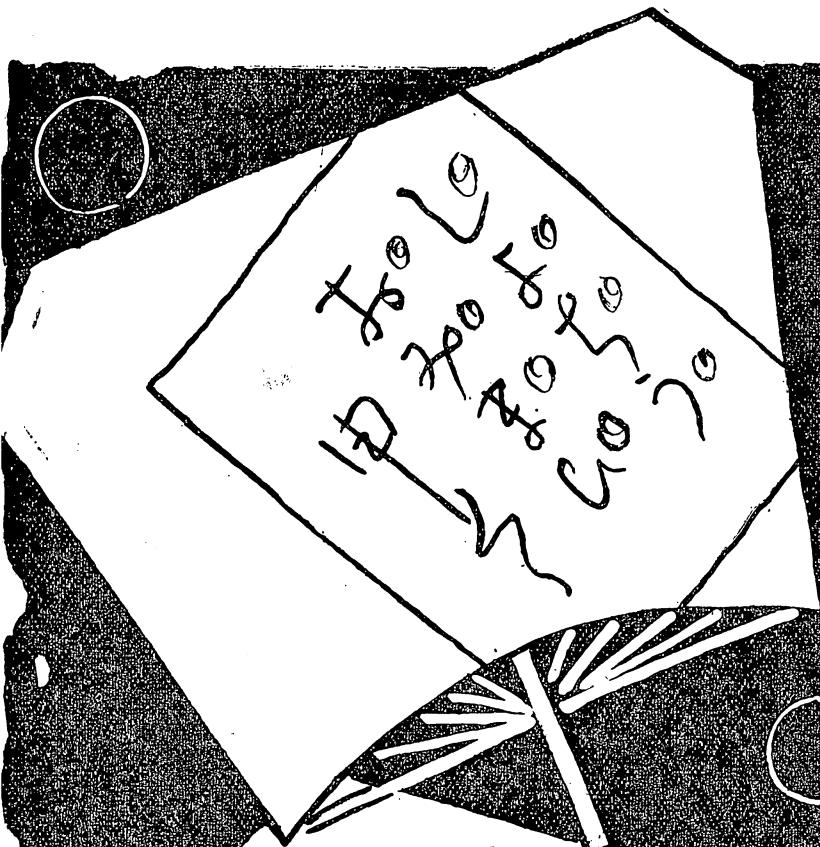
・ 演 歸 劇 郎 五 ・



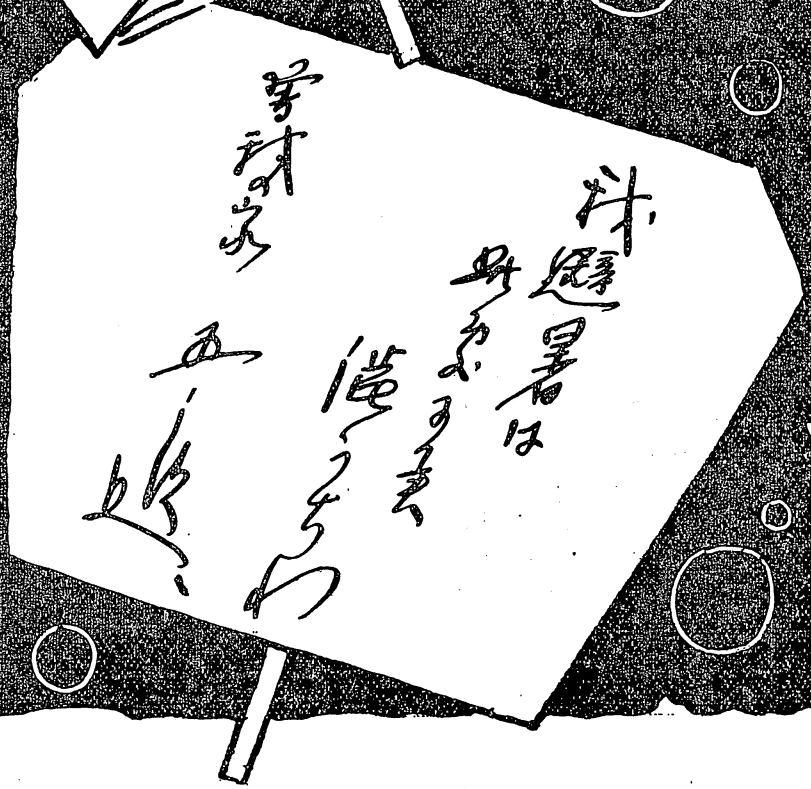
ペンキ
味佳
メリ
意心

郎 五 吉良本松者業失 「點通共」 上
郎 五 なつお房女助平 「影帆」 下

座 伎 舞 歌 の 月 8



おし
おし
おし
おし
おし
おし



学研
学研

汗

題

暑
暑
暑

暑
暑
暑

暑
暑
暑

五

題

暑中御伺申上げます

松竹家庭劇

同照明	舞臺監督	勝本部	小織	山元	高安田	石浪	村橋	春木	東日	曾我	曾我	曾我	曾我	曾我	曾我	衆田	澁谷
堀部	文藝部	茂林寺	桂一	田隆	安田	花田	野村	日愛	明愛	十	天	京	時文	喜久	左通	天	外
秀次郎	森上	山和	新三	直文	也	千滿	郁音	紅瑛	子子	吾	照	彌	助	彌	童鶴	馬	外

暑中御見舞申上げます

吉例帝都公演



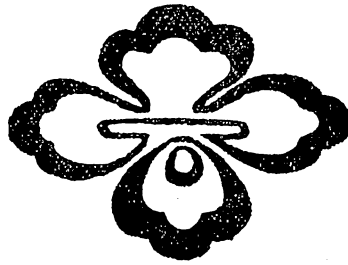
新
國
劇
同一

於 濱町明治座

新國劇一百の全座員每號執筆

誌 雜
新
國
劇

暑中御伺



吉本興業合名會社
移動演藝部

藝演 百貨を誇る吉本の

移動演藝の御利用を!!

大衆演藝の豪華——落語、漫才、奇術
其他多種多様な笑ひの突撃隊が皆様の
集會に、宴席に御利用願ふべく待機致
しております

- ▽派遣費低廉、指定の日時場所へ
- ▽大阪、京都、神戸間どこへでも
- ▽一座として地方巡回も應需します

御申込みは

吉本興業合名會社の

移動演藝部へ

大阪市南区東清水町三〇
電話南75(四七八八番
〇九五一番

京都は——[本局六〇四三番(新京極花月劇場内)
本局二二三三番(新京極富貴内)]
神戸は——湊川三〇四九番(新開地多聞座内)



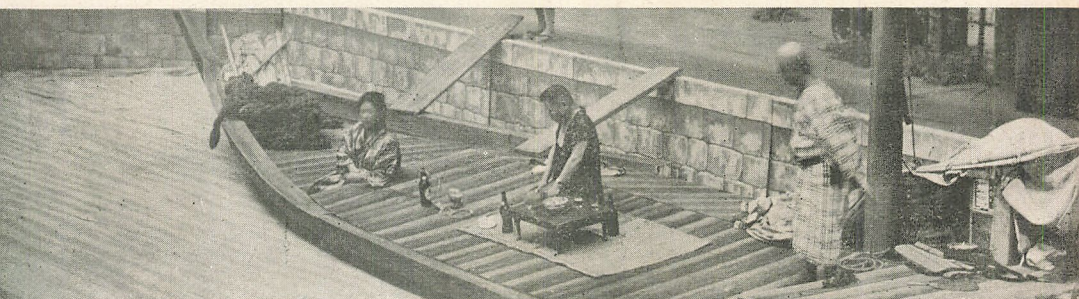
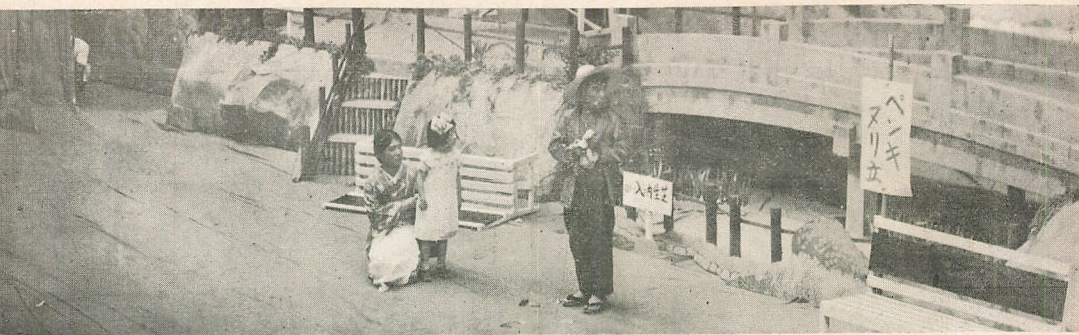
影撮念記に共と佐大井酒



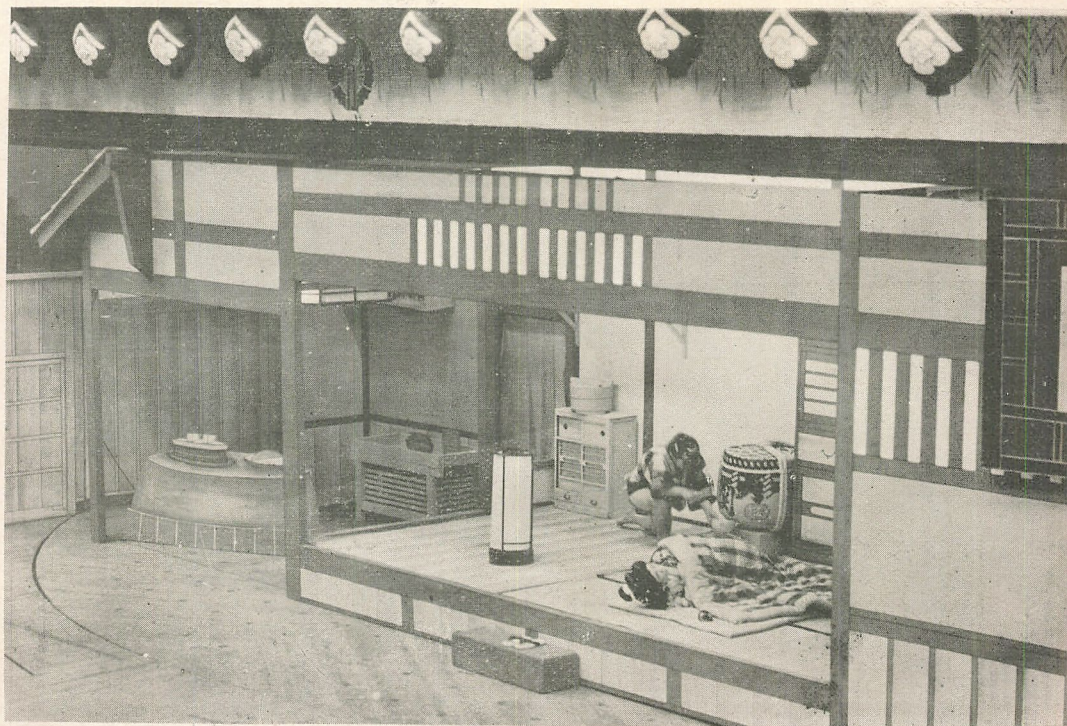
舞面臺と五郎の勇士沖花善牛

敵艦見ゆ

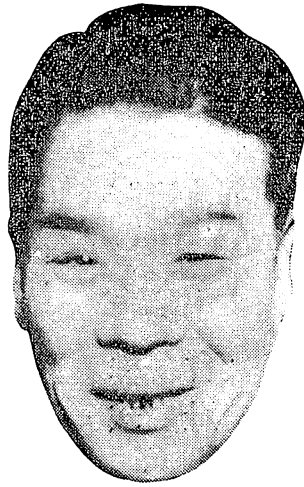
日露大戦秘話の劇化



上五郎劇「共通點」帆影「下」偲ふ草舞臺面



曾我五郎劇の替



幕開時五夕毎

幕開時四り限に日初

第一	鑛金と地金	三場
第二	久公と熊公	二場
第三	怪談執念の蛇	二場
第四	はりこの寅	三場
第五	天下の俠客	一場

廿六日
より
まで
十日間
限り

いし涼程い寒

座伎舞歌大



株式會社

京都市中京區寺町通三條上ル

三和銀行寺町支店

電話本局 (2)

三四五六番
三四五七番

振替大阪六四四六二番

贈 案
舌 內
書 書

全京阪電鐵廣告

京都市營電車內廣告

輕氣球揭揚廣告

京都全市浴場廣告

柱掛額面廣告

休業額面廣告

ポスター掲出廣告

浴室內特別廣告

電車枠型廣告

實業廣告株式會社

京都市三條寺町角

電話本局四三二〇番

氣球常設揭揚場

京都市河原町四條白鶴ビル

迅速丁寧

銅版
凸版

吉谷寫真製版所

東成區大今里町七五九
電話南六八一五番

大阪市東成區鶴橋北之町一丁目

各種印刷
加藤印刷所

電話天王寺二四七番

暑 中 御 伺



北海道 雪印アイスcream
 大坂市 北區 山崎町
 極東 食品株式會社
 京都 都市 佛小 路大 宮東
 熊田商會
 京都 都市 松竹 系劇 一場
 中村 日丁 堂商會



カユミ止チツク型
蚊よけ

SKI
スキ

毒虫ノ襲来ヲ防ゲ

蚊、蠅、蚤、南京虫、蟻、毛虫
等嫌ナ毒虫モスキノ使用ニ依テ完全ニ驅
逐ス

カユミヲ止メヨ

之等毒虫ノ刺スコトニ依テ起ルカユミヲ即
座ニ解消スル新劑ニシテ大人ハ勿論幼兒ト

雖モ度々使用スルニ何等皮膚ヲ害セズ又發汗ノ防害ヲモナサズ無脂肪性ナレバ感觸ヨク
佳香ニ富ム且癢痒部ノ搔傷ニヨル化膿菌ノ侵入ヲ防ギ皮膚炎ノ豫防ヲナス

スキー使用法

チツク型ナレバ使用上非常ニ簡便ニシテ右圖ノ如ク銀包紙ノ所ヲ持つテ藥品ノ露出部ヲ
目的ノ個所ニ輕ク塗擦スレバ足ル

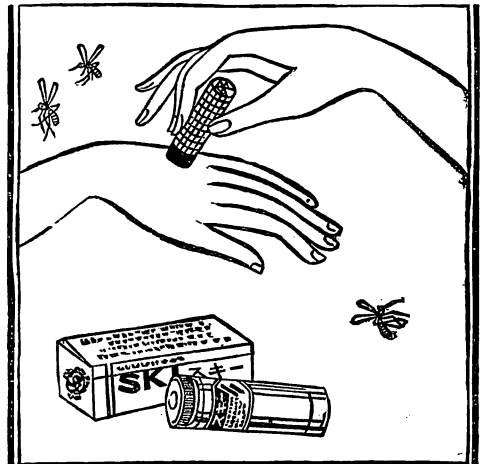
價 四十錢

製造發賣元

光 榮 商 會

大阪市東區伏見町三丁目二七

電話本局三三一五番
振替大阪三三一七番





座角の月8・「**件事麻當**」動騷家おの治明

野	辻	太	彌	小	郡	西
原	笠	山	古	令	家	
剛	金	野	露	妾		

面臺舞「**鞭の言無**」下





「小僧六十むさし」

岡 福・の し お 娘
野 辻・僧 小 鼠

曲浪大藝文

不帰如

色脚行士内坪・作原花蘆富徳

(終臨の子浪・篇前)

月満軒光天

(八一七三三六五)



浪子と武男、山科の恵まれざる邂逅から、いのちを前篇として、かよわい肉體故に、いよいよまさき情熱の嵐の中に背をの君武男を戀ひ慕ふいたまはは憤する私自身を存分泣せましたと。泣いて血を吐く満月師の悲歌は、こゝに奏でられ再び三たび天下の熱狂の坩堝と化さんとする常勝將軍満月師の熱作品であります。

出たッ!!破竹の巨星
満月師渾身の熱演
文豪徳富蘆花先生畢生の名作
名脚色を得て
堂々涙曲化する!!

不朽の二大文藝作品遂にレコード化する!!

品作座術藝

唐お人吉

色脚一英本松・作原菱花村川

座術藝

子重八谷水

龍虎・雄正田村・唄

(三一四三六五)



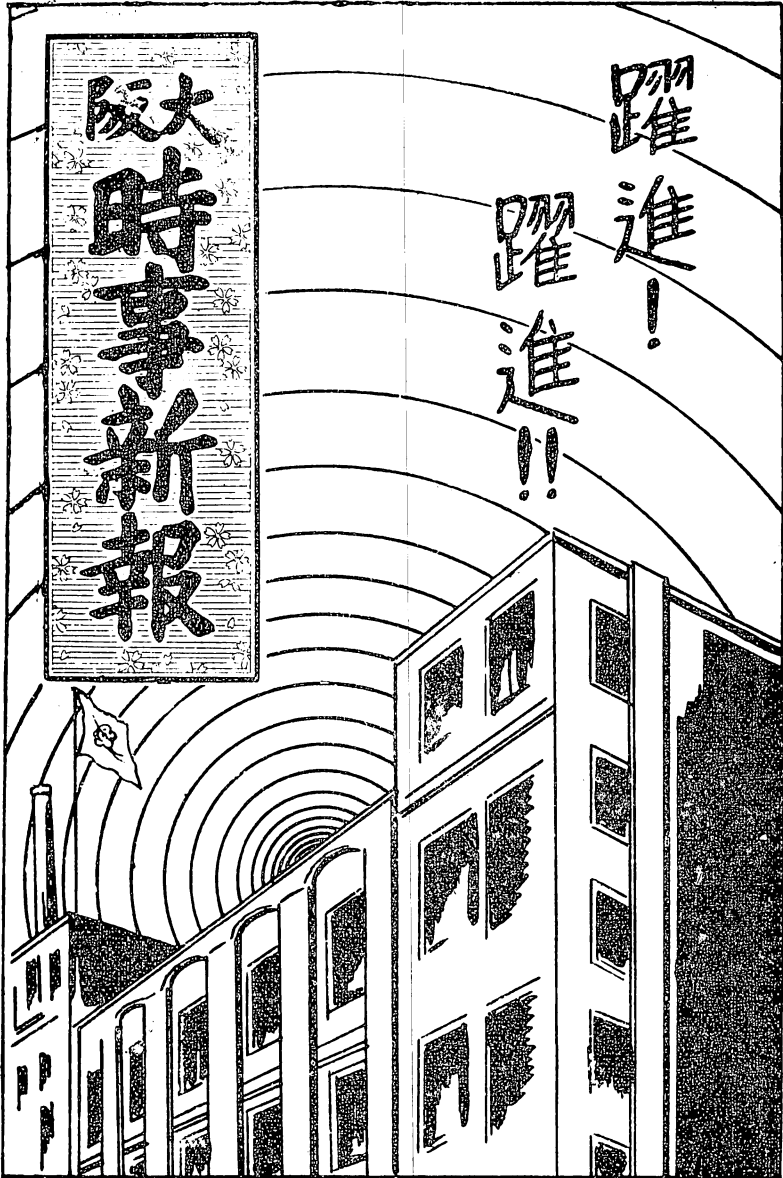
「鶴松さんお前といふ人は……」
消え蒼い眼のよな下田の海にのびれの千鳥が……
八重子が「お吉か、お吉が八重子かと稱せられる天衣無縫の神技は疑つて、この三枚の音盤に吸収されました。開化の犠牲となつた薄命の佳人お吉がこゝに再生されるのです。ファン提供する珠玉の名盤でございます。これこそ御貴店の御客様に!!」

「思ひ出しますお吉の聲を磯の千島の啼く音にも哀傷にむせぶ明鳥の名調を麗婉水谷八重子に聴くようこび」

ドコロ  イハイタ

大阪時事新報

躍進！
躍進！！



明に庭家いる

使命と
特色

正しい報道
正しい批判
正しい指導



大阪市民讀本として推奨

- 一家揃つて讀める記事ニユース
- 新らしい知識と豊富な趣味を得る
- 大阪市のことは表裏みな分る
- 御家庭に必要な「相談欄」あり

▼ 毎夕 六頁 五拾錢

一部賣市内到るところの立賣

本紙御購讀の御申込

大阪朝日新聞販賣店

暑
中
御
伺

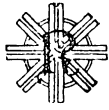
京
華
日
報

社
長
武
藤
欽

京
都
市
御
池
通
河
原
町
東
入

電
話
上
一
一
四
七
七
九
番
（
編
輯
用
）
（
營
業
用
）

大 阪 市 中 島
(電 稱 畧)



大 阪 電 報 通 信 社

電 局 本 五 五 五 九 九 一 六 五 (23) 話
 一 九 九 八 三 二 一 六 五
 六 〇 〇 三 八
 六 〇 〇 四
 六 〇 〇 五
 二 〇 〇 二
 三 九 二 〇
 五 八 〇 〇
 五 八 〇 〇
 印 刷 局 用
 二 〇 〇 三

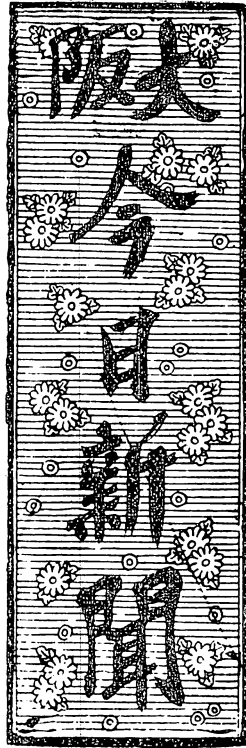
電

八百哩の専用電話
 東京—名古屋—京都—大阪—神戸—
 岡山—廣島—下關—福岡(同時送之)
 八百哩の電送線
 東京—名古屋—京都—大阪—岡山—
 廣島—福岡(同時送受)
 電通内外業務所
 東京—名古屋—京都—神戸—松山—岡山—
 廣島—下關—福岡—長崎—熊本—大分—
 鹿児島—金澤—長野—仙臺—青森—函館—
 臺灣—釜山—京城—大連—奉天—新京—
 北平—哈爾濱—上海—南京—天津—漢口—
 青島—濟南—倫敦—桑港—紐育—羅府

通

通 信 部
 ニース供給、内外經濟通信
 時事喜與通信、出張攝影
 告 部
 内外新聞、雜誌廣告代理取扱、
 圖案文案意匠
 製 版 印 刷 部
 寫真製版、紙型、鉛版、
 活字鑄造、各種印刷、出版

社長 笹川春二



大阪市天王寺區東上町三九

發行所

大阪今日新聞社

電話 天王寺 五五〇二一九番 (編輯局)
五五〇二一九番 (營業局)

大阪市東區北濱一

大阪經濟新聞社

電話本局代表四〇〇九番

經濟界の指針！

株界進出の士
利殖を望む士

實業家も、事業家も

本紙を読んで成功の同伴とせよ



毎朝新報



株式會社

每朝新報社

大阪此花區上福島北一ノ七
 電話代表 佐土堀五九二一
 番 〇八九三・番 二五九五
 佐土堀 座 〇四二〇六番
 私書 函 西 野 田 局 二 十 二 號

大阪新日報

大阪が生んだ異彩ある夕刊新聞として堅實な歩みを續ける皆さまの大阪新日報は更新の活氣を全紙面に漲らせて一流の特色を發揮しつゝ夕刊祥を壓して嘖々の好評を博しつゝある

◆大阪で一番面白い、特色のある新聞を……ぜひ御愛讀下さい!!

發行所

大阪此花區上福島南一丁目

大阪新日報社

電話福島(45) 二六〇番
 二六二番

(價定)

郵税 一ヶ月部 二十五錢
 一ヶ月部 二十五錢

趣味と實益に富む
京都唯一の赤新聞

購讀料一ヶ月金四十錢

年中
無休



みやこ日報社

本社 京都富小路三條

電本局五六〇〇・五六〇一・五六〇二番

暑中御伺



夕刊四頁
年中無休

大阪市北區西堀川町一四
電話(專用)北三四一

赤い帽子に
白の制服を
着た
御園クレーン
はペラの花を
想はゆき心地
香るゆき心地
よし健康なる
よし肌も作
業し肌も作
らすかか

御園

ムム

ガンシツニアウ

ンセ五十三...型 大
ンセ五十二...型 小
ンセ五十三...型とあはて



伊東胡蝶園 東京・大阪

月刊・演劇雑誌・雑誌

八月號

演劇類編

第十年

第七百輯

中座「續蜻蛉三人旅」



助 延 若 青 門 梅 玉 格 三 人 旅 劇 車

● 鎌三の思出 ● 高安吸江 ●

此夏は珍らしく道頓堀へ三代記が出るそうです。三代記といへば私はスグあの惨しかつた顔見世が思出されます。

大阪の誇であつた名優鴈治郎が最後の舞臺。それも僅か三日で休まねばならなんだ。あの痛々しい三浦之助、矢疵の代りにお腹から下全部の浮腫で、軽くは造られてもやはり緋威の鎧だけに身體の自由を失ひ、花道の出はまだしも、井戸で佐々木を呼かける見得などは腰が上からず、三浦位の役で休むのは口惜しいが、脚が腫れては中々形がつかず苦しかった、との打あけ話もまだ昨日のやうです。

「三浦は十次郎と違ひ長門守やさかひ、シツカリした處が無いとアキマヘン。母親の事を案じるのとモウ一ツは佐々木と約束した通り、計略が巧いこと行けるか

どうかといふ心で来まんね。」

それで氣がついた時、時姫が介抱するのを見て、ヤツバリ来てゐたかと安心の思入をします。一體昔の狂言は底を割る、即筋道が豫想されるのを忌んだため全體の筋から考へて不合理なところが多く、此處でも普通では姫の姿を見ていぶかり、母の介抱の爲に來てゐると聞いて少し安堵する。即ち母の病氣を案じるのが主になつてゐます。古く海老蔵が演つた時(天保五年)もそうだつたと評判記に出てゐます。研究好きの鴈治郎はしかしそれでは納りません。彼は更に反復正本を讀返して三浦の眞意を現はそうとしました。

又門口へ来て「嬉しやこゝぞと氣の張弓」で矢を抜きその血を嘗める型がありますが、鴈治郎はやりません。それは後に「血汐を隠す着がへの鎧」とある文句

に據つたのでせう。猶此三浦を腹切て来る人もあつたが無論ハキ遠へであるのは明です。

それから此れは前に一度書きましたが、時姫に對する情愛で、いかに正本に明記せられずとも、又斯うした難局に際してそこ處であるまいとの理窟も出るであらうが、あゝした可憐な姫の犠牲的な決心、殊に始に盡す孝養に向て、孝心深き此若武者が無關心であり得たと考へられない。少くとも孝貞の間に苦悶する姫に對して同情の態度が認められねばなりません。此れに對して鷹治郎は特に何等の意見も洩しませなんだが、此れからの演者は此點に留意ありたいと思ひます。主役の佐々木、即眞田幸村は一にも計略二にも智謀で、まるで虎の巻が鎧着て出たやうに全く人間離れがしてゐます。それでも此場では滑稽な藤三郎から堂々たる軍師の高綱へと頗る變化に富んだ役で面白く見られます。

型としてやかましく云はれる處は「地獄の上の一足とび」で兩手を高く振て舌を出す見得です。是は地獄の恐しさを現はすつもりかも知れませんが、三世歌右衛門などが始めましたか、中車や多見藏などもやりまし

た。古風で面白いと云へば面白いですが、下手するとガタロの化物の様で變なものになり、且又理におち易い當世風の演出と調和し難い點をも考へねばなりません。

男の方が計略本位で冷酷なのに引かへて女の方、姫はもとより母親やおくるまでも犠牲的で情熱をそなへてゐるのは面白い對照です。殊に時姫は恩と戀との間に責められ、終に父を討たうと決心しながらも、扱となるとそれならず、愛人の後を追て自殺する不幸な女性に描かれ、此點吉田御殿の千姫とは大分に距離があります。

それに此高貴な姫君は豆腐腐から炊事までさせられるかと思へば、後段では鎗をとつて手水鉢を突かうとする程の豹變で、芝居道で三姫のワツとして難役扱ひするの無理はありません。

私の見たうちで最も深い印象を得たのはやはり故雀右衛門のでした。此人の初々しい艶麗さはいかにも院本の姫君らしく、三浦の肩に手をかけて甘えるやうな素振や、「北條時政討て見せう」と刀を見て決心しながら更に、「と、様許して下さりませ」と拜む可憐な形な

と特に目に残つてゐます。それから今の歌右衛門です。第一あの美しい氣高い容貌だけでも御大將時政公の息女としての品位は充分である上に、長く團菊に接して體得した藝の力はまた格別であつたが、しかし艶とか潤ひとかの點はどうも京家程ではなかつたのです。まだ話すべきことはいろいろ残つてゐるが、そ

れは又のことにして最後に望みたいのは、三代記のやうな狂言は、時間などの點を顧慮することなく全部を忠實に演ることです。即ち豆腐買ひから母親の自害まで残さず演るので残に今度の様に關西の巨頭が顔を揃へる場合、一層さうした企が適當であると痛感する次第であります。

●明治大正昭和三代記●高谷伸●

徳川幕府の彈壓のきびかつた時代に大阪陣を戯曲化するのには何かのカモフラージュが必要だつた。そこで時代を溯つて、似たやうな境遇なり性格なりにこじつけて出来上つた二つの戯曲がある。

冬の陣は「近江源氏先陣館」であり、夏の陣は「鎌倉三代記」である。主役の佐々木盛綱と高綱の兄弟は眞田昌幸と幸村に擬せられてゐる。徳川家康は北條時政の假面を被せられて狸爺の本性を現はした。

そこで三代記の絹川村に於ける時姫は千姫であるが高綱は眞田幸村にちよつと阪崎出羽守が混せてあるのは、顔面變相の件で察せられる。三浦之助は秀頼と木村長門守とをちやんぽんにしたものである。結極、鎌倉の芝居でもなければ大阪の舞臺でもない。どちらでも觀者の空想に任せる歌舞伎の夢幻の世界なのである。

さう考へてくると、遠い時代にみたこの芝居ほどな

つかしい氣がする。

わたしがはじめてこの芝居を記憶してゐるのは、先代市川市十郎(眼玉)の高綱だつた。その頃腰はふらついてゐたが寫樂の錦繡を思はせるやうな輪廓の大きな顔にきまり／＼に見る手の指をひらいた形が不思議に繪のやうに目に残つてゐる。その時の三浦之助は後に實川正朝になつて死んだ中村扇駒の森米太郎だつた。わびしい舞臺がみじかい夏の夜を妙に見せてゐた。

それから飛んで二度目に見た鎌三は近年でも豪華版だつたらう。最初のとはうつて變つた立派さで、大正六年五月の浪花座だつた。

歌右衛門襲名問題から歪みあつてゐた鴈治郎と現歌右衛門との握手ができて、その顔合せの時である。鴈治郎の三浦之助と歌右衛門の時姫はいふまでもなく、高綱は八百藏時代の中車で、團菊以後隨一の三代記である。

これにはゲテものをあさるやうなわびしさとは反對に、浮世繪でも完成した美しくさを持つものだつた。

中車の高綱の迫力、鴈治郎の三浦之助の美しさ、歌右衛門の時姫に水々しい美しさはなくても藝品の高さは

争はれぬ千姫なり時姫なりの地位を物語つてゐたし、おくるが市藏、阿波讀岐の二人の局が魁車と先代吉三郎だつた。そして母親が傳九郎になつた先代芝鶴だから相當賢澤なものであつた。

それから昨年の顔見世までに何度となく三代記もみた。鴈治郎の最後の舞臺はとうとう見なくなつたが、吉右衛門の高綱、我童代役の三浦之助、福助(梅玉)の時姫に就ては當時に劇評を書いた。

延若の高綱を見たのは大正十三年の春の南座だつた。宗十郎の三浦之助、故人雀右衛門の時姫だつた。

中車では前半の輕妙さが無い。吉右衛門は愛嬌でそれを補ふて行くが、時代物らしさではやはり延若の高綱が面白い。吉右衛門では「龍は時を得て天地に蟠り……」のせりふが何となく活歴めく。

三浦之助はやはり鴈治郎を遠く思ひ起し、時姫では晩年であつたが流石に雀右衛門だ。

それにこの芝居は妙に若手の芝居で出る。高綱は青年劇では秀郎、技藝座では政治郎時代の福助、その他今の實川八百藏や満洲へ行つた市川右治丸などの芝居ををりをり思ひだす。三浦之助でも青年時代の狂藏は

洋酒界の革命兒國產洋酒の逸品
國產金鶴印

ウキスデキ
 プランス
 ベルモット
 キール
 ペール
 ジェント
 ベーバ
 ジェント
 滋養葡萄酒



元 賣 發
横山商店

株式會社

大阪市東區豊後町三番地

電話東(94) 一六六二
 二〇三三
 四六四九

今のやうにいや味がなかつた。市昇が三浦之助をやつたのも見た。弓杖つくと體がよいよのびたのが記憶に残る。

大芝居小芝居いろいろの三代記を記憶の底からよび起してきて、さて、今度の三代記にぶつかる。延若の高綱、梅玉の三浦之助、魁車の時姫といふ組合せは現在では動かせぬ所であらう。理窟ぬきに淨瑠璃から出た

三代記として、大阪陣とか和田合戦とかの詮索にこだわらず上方らしい歌舞伎味をふんだんに見せて貰ひたい。

夏の陣だからといつて涼しさな舞臺より、あつくるしさうな演出の方が時代味がある。

短かい夏の一夜さからだのとけることもあるまい。



あの時の三浦之助

高原慶三

わるいとは聞いてゐたがかうも弱つてゐるとは思はなかつた。顔がウダばれて臉が重い。

「大ぶお苦しそうだんな」

三浦之助の顔をしてゐる鏡の中の鴈

治郎はいつもの愛想のよさを忘れて「夜るねられんので困ります。足が痛んで……」

呼吸苦しうに口を左頬にひいて伏目になるのはいつもの癖だが、この日は特に苦しうな表情に見えたこの老僕にして夜に寝ない事は恐ろしい、達者なものでも心臓をわらくする。私はある近い将来の豫感を想ふと心寒うなつた。

「本鎧やないと気がすんまへんのだが、こんどだけは縫ひぐるみの鎧で辛抱してもらひます」

これだけ苦しんでゐながら、やはり舞臺の事が氣にかゝるこの老僕を尊く見た。

やがて、鎧をつけたまゝ仰臥した三浦之助は足にむくみが出て、襦當を二人の男衆がやつと手傳つてつた。

それで暫く起きあがらぬ鴈治郎だつた。

かうした席に長座する心なさを自ら叱つて、私は鴈治郎の部屋を出た。これが鴈治郎と、私的に物のいひ納めとなつた。

◇

舞臺——で三浦之助は杖にすがつて花道から現れた（私はこの前に「道頓堀」誌上で）足のわるい鴈治郎に三浦之助を演らせる白井會長の賢明さをたゝえたのだが、さてかうしてまのあたり三浦之助を見て、この人間最大の苦悶に直面する人のつらさも知らずに、冷たい物のいひ方をした自分を再び叱つた。

「鴈治郎もモウあかんな」

「これが見おさめかもわからんぜ」隣席の私語が一層私の心を重くした。

この苦痛の極致を體現するこの人に對してもやかくいはねばならぬ劇評セウバイの淺間しさ、味氣なさをしみるゝ感じた。

私は眼を掩つた。

吉右の高綱、梅玉の時姫も鷹治郎とシバイをしてゐるといふより、この大患の人をいたわるかに見える。その舞臺を、快く見た。

私は芝居を見ずに親切さを見た。反つてそれがせめてのなぐさみだつた。

かうした所感を、萬一鷹治郎が癒つたとしたら、お互に過去の話として相談らうとしたのに……この三浦之助は翌、十二月三日から舞臺に起たなくなつた。そうして中村鷹治郎は永久に人間界から消えた。

あの時の親切の人梅玉が、こんど三浦之助を演るそうだ。この三浦之

助に幸ひあれ。



私と三浦之助

中村扇雀

私と三浦之助——それは役者としての私の生涯中最も深い思出の多い役となりました。それは父の最後の役になつたばかりでなく……私には

わすられぬものが胸にあるのです。

十四の時（今から丁度二十年前）

子役ばかりつとめて居た頃道頓堀角座で私たち子役ばかりの子供芝居が初めて出来た時私が三代記の三浦之助をつとめさせていただきました。

それは私が大人の役をつとめた最初でした。其時も丁度夏の事です。其後しばらく大人の役もつとめ青年となつて今日まで父の得意の役も勤め其後は見覚え、或は父に直接部分的に聴くだけでしたが、此三浦之助をつとめた時ばかりは子供の時でもあり初めての大人の役とでもいふのか父も一生懸命でした。それこそ手をとり足をとり父自身で立ち上がつていく度も、初めから終ひまで三浦之助を舞臺通りつとめて私の型を直し、台詞の思入れまで充分おしへてくれました——嬢さんがたへ歸の

師匠が手ほどきの時のように——あ
 んなに教へていたゞいた事は其後一
 度もなく其時のつらかつた事は未だ
 わすられませんが同時其時の懐しさ
 もわすれる事が出来ません。父も恐
 らく私ばかりでなく人様にもあれだ
 け熱心に教へた事はあるまいと思ひ
 ます。其私が初めて大人の役をつと
 めた懐しい思ひ出の三浦之助が父の
 最後の舞臺とならうとは……
 三浦之助をつとめた父の前髪姿が
 私の胸からは永久にはなれません
 ……

地方讀者の爲に

「新劇壇」八月號

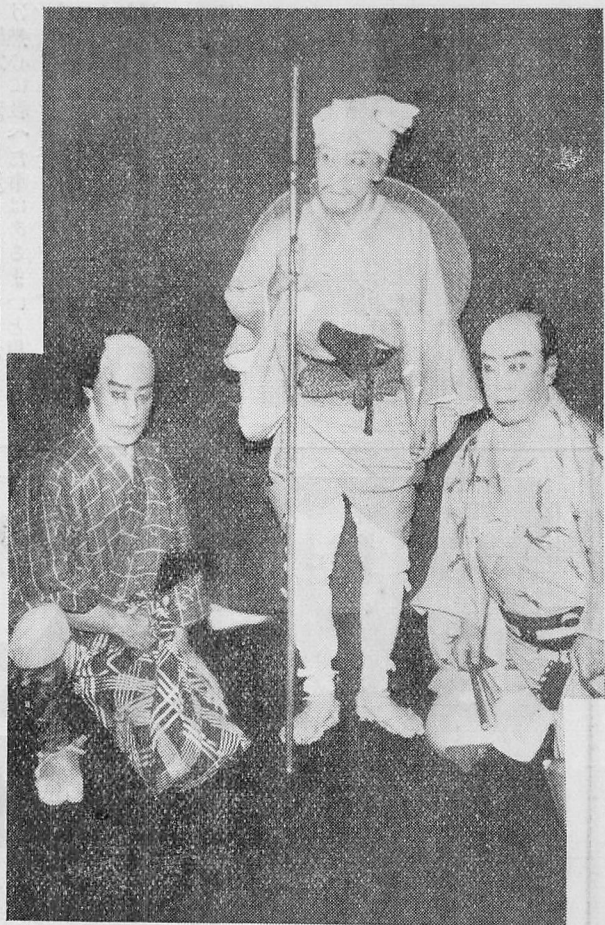
道頓堀編輯部にて取次ぎ

ます



舞見御中暑

店支阪大行興竹松



● 梅玉・魁車・延若 ●

ト
リ
才
に
寄
す

A 菱田正男
B 森 ぼのほ
C 桂田 暁香
D 渥佐 満國

A

菱田正男

「鷹治郎の歿したあとの關西劇壇はど
うなるか」——といふことは、鷹治郎
の生前から噂されてゐたものだが、サ
テ當の鷹治郎が歿してしまふと、延若
梅玉、魁車、壽三郎の所謂四巨頭制に
ならうといひ、更にその四巨頭の二分
或ひは四分立興行が話題に上つた。

テ結局は四巨頭は四巨頭として依然
健闘をつづけ、そのうち壽三郎のみが
あちこちへ引つぱり出されて四巨頭と
いふよりは、どうやら三巨頭の關西歌
舞伎といふ形となつてゐる。

それが壽三郎にとつて反つて俸せか
どうかは別問題として事實はさうなつ
てゐる。誰もが、梅玉、魁車、壽三郎

によつて組織されてゐる「かなへ會」がどうなつてゐるのか——と言ひ出しませない。實際「かなへ會」も有名無實の形で、時折好劇家の口の端に上るだけである。

ところで延若、梅玉、魁車が中心でしばらく芝居をつづけて行くとするならば、これは或る意味での「かなへ會」と謂へやう。これへ壽三郎を加へると一寸水に油の藝風の豊田家は損をするし、四人一緒に出れば狂言にしてもより一層銓考難に陥ぐだらう。

それから考へると、こんどの新トリオ、つまり「新かなへ會」？なら歌舞伎よし、新作よしといふ器用もの揃ひだから全くやりよい。だからこのトリオは關西歌舞伎の將來にとつては極めて重要な存在である。もしこのトリオでグン／＼やつて行けるならば、何も

延若一座、梅玉一座、あるひは魁車一座と無人芝居を多く作る必要はないわけだ。皆がガツシリ組んでやりさへすればいゝのだから。

だが、こゝで考へねばならぬことは脚本である。三人それ／＼に合ふ役のあるトリオ狂言ばかりウンとあるわけでない、といつてさういつも型にはまつた役廻りで見せられては見物の方が参つてしまふ。歌舞伎なら去年大阪中座で延若、梅玉、魁車、壽三郎で「覽仇討」が出たが、これなど四人顔合せとして考へたものぢやが、この筆法で行けば「夏祭浪花鑑」で延若の團七九郎兵衛、梅玉の徳兵衛、魁車の義平次も出せやう。これはいつかも壽三郎の團七、魁車の義平次と徳兵衛の二役の二人芝居よりもつといゝものとならう。それから近松物なら「紙治」を出

して、延若の治兵衛、梅玉の小春、魁車の孫右衛門、あるひは「女殺油地獄」の延若の與兵衛、梅玉の七左衛門、魁車のお吉もよからうし「封印切」で延若の忠兵衛、魁車の八右衛門、梅玉の梅川も面白からう。だからこんどの中座でやるといふ「鎌倉三代記」も、いかにお盆だからといつても、今更「鴈治郎を偲ぶ」なんて佛くさい意味でなく、このクトリオの歌舞伎といふ建前で、梅玉初役の三浦之助もよからうし、魁車の時姫、延若の佐々木はこの顔ぶれでのそれ／＼に適り役だと思ふ。

歌舞伎にはかうした三人中心の脚本があるが、サテ新作では——捜せばないこともなからうし、こんどの「水戸黄門鱒蛤三人旅」も東京の猿之助、友右衛門の「彌次喜多」のたとへ向ふを

張つたものだとしてもこれなどいゝ思ひつぎだ。こんなものでもよく、いくら何をやらせても器用者揃ひだからといつても（何しろ三人共歌舞伎俳優であり、歌舞伎狂言さへやらせておけば無難のだが、いつまでもデン／＼物などをやらせてゐるのもどうかと思ふだけに、新作物のいゝ作品をやらせたことは松竹側でも考へてゐることだらうから）さう無暗な作品は困るけれども、この際新しい作家を大いに捜し出してドシ／＼いゝものを書かせてこの名トリオを働かせて見せることが一番いゝことだ。これは鴈治郎をうしなつた大きな痛手に呻吟してゐる關西劇壇を更生させる最入醫藥であり、此の名トリオをウンと働させることによつて沈滞せる關西劇壇を大いに興隆させたものだと思つてゐる。

B

森ほのほ

梅、魁、延のトリオが可いとか、わるいとか、古いとか新しいとか今はそんなことを言つてる場合ぢやない。今日、明日の上方歌舞伎は是が非でもこの三優に俟たねばならない。それぞれの後援者や一般好劇家の支持も必要だが、それよりも先づ三優めいめいが禪をグツと締めて懸つて貰はなければならぬ。それにつけても第一に議題となるのは、狂言の選定だ。で、頭に浮かんで来るままを取あへず書きつけて行く——多少とも参考になれば小生の望は足るといふものである。

後藤の銃炮場

又兵衛
關女衛
泉ノ三郎
魁梅延

酒井の太鼓
碓知盛
國姓爺
夜討會我
魁の仇討
金關寺
太十
御所三
兜軍記
矢口

酒井居
伏屋井
鳥居
知盛
典侍局
相摸五郎
錦藤内
甘輝女
五十郎
仁田ノ四郎
瀧筆助
初勝五郎
松永花郎
久吉
雪姫
光秀
久吉
辨慶
お慶
侍從
阿古屋
重忠
岩永
頼兵衛
六藏
酒井居
魁梅延
伏屋井
鳥居
知盛
典侍局
相摸五郎
錦藤内
甘輝女
五十郎
仁田ノ四郎
瀧筆助
初勝五郎
松永花郎
久吉
雪姫
光秀
久吉
辨慶
お慶
侍從
阿古屋
重忠
岩永
頼兵衛
六藏
魁梅延
延魁梅
魁梅延
魁梅延
梅魁延
魁梅延
魁梅延
魁梅延
魁梅延

白石揚屋

宮城野
信城六
惣信夫
延魁梅

五大

源五兵衛
小五兵衛
三兵衛
梅魁延

妻八

八郎兵衛
おつ八
銀つ八
魁梅延

夏祭

團兵衛
義平次
不次
魁梅延

鞆當

不名古
義名古
團名古
魁梅延

説明もするつもりであつたが、わざと略さう——。

C

桂田曉香

鷹治郎亡きあとの關西劇壇はどうなるか——此問題については、今迄先輩

諸氏によつて、いろ／＼と云ひ盡され
たと思ふ。

東京からも應援もよからうし、關東
關西などと云ふ色を無くしてしまふの
もよからう。然し差追つた現實の問題
として、いろ／＼と支障が出来て來
る。

で、一等いゝ方法として、誰もが考へ
た。最も平凡な案としての、梅玉、魁
車、延若のトリオである。平凡ではあ
るが、之が一番無難ではあり、關西を
背負つて起つ三人ではあり、平凡が平
凡でなく、面白いものにする可能性の
充分にあるトリオでもあるのである。

其處で面白いものにするには、どう
するかの問題が起つて來る。

先づ最初に脚本の選定である。之に
は、今迄鷹治郎がやつて好評だつたも
のは、一應お倉にしてしまはなければ

ならない。

比較されるだけでも損であり、梅玉
や魁車にすれば惜しくもあらうが延若
と手を組んだ以上、白紙でかゝらなけ
ればいけない。よし鷹の當り狂言を出
した場合であつても——

歌舞伎の脚本で、最近上演されない
ものが随分ある。

今迄は鷹治郎を中心にして脚本が選
定されたが爲に、鷹の柄にない狂言で
久しく脚光を浴びて居ないものが相當
ある。

その中には、梅玉や魁車に打つてつ
けのものも澤山にある。

又延若とのトリオだつたら、ひつた
りと當てはまる狂言も幾つかは必らず
ある。

上演して見て、ク成る程々と感心さ
せられるやうな舞臺効果のあるものも

ないとは云はれない。

此三人が組んだ事によつて、芝居が非常に新鮮なものに見え出して來たのは事實である。

鴈治郎が亡くなつた事によつて關西の劇界が淋しくなつた事よりも、之を一つの區切りとして、關西の劇界が、方向轉換を行ひ此三人によつて、今迄とは目先の變つたものを上演し、新しい観客層を得る事が出來たら、一時の淋しさは喜びと變はる。

團菊左を失つた東京の劇界が、ちやんと立直つて、今では其豫備軍ですらひとかどのものになつてゐる。

あのヒロイズムの劇團新國劇ですら御大澤田正二郎を失つても立派に立直つたではないか。それから見ると鴈治郎を失つた事は大きい損失ではあるがさう落膽すべき程のものでもない。

私のきいてゐる範圍では、此三人が

從來折合ひが、悪かつたと云ふやうな事もなきさうだし、意氣が合はなかつたと云ふ事も知らぬ。今迄は、いろいろな都合で一緒になれなかつた迄である。

私は此三人が、喜劇などを手掛けるのも一つの方法ではなからうかと思ふ其意味で八月の中座に納涼陣として選ばれたク黄門劇々を期待する。尤も脚本を見てゐないから、どう云ふ風なものか、はつきりした事を云ふ事は出來ないが、恐らくユーモアたつぷりの愉快なものにちがひなからうと思ふ。關西の人はどう云ふものか、俳優が嫌ふのか、経営者の方で出させないのか知らないが、新しい芝居をあまり手かけない。

關東と比較して遙かに少い。

今度白井事務の案によつて、新しい脚本作家發掘のためとして雑誌新劇

壇が生れた。

茲等から必らず新しい戯曲が生れて來るにちがひない。

このトリオは、それ等の新しい作家の作品をどんく手掛けて行つて貰ひたい。

然し充分自重して。

D

渥 佐 滿 國

三人旅と云つても強ち今度の黄門様旅日記の事許りぢやない。これから先きこの三優の旅道中はどれだけ續くかわからない。壽三郎はもとくこの三優とは年齢も若く藝の質も異つてゐる人だから獨り立ちで、或は又變つた相手求めて勝手な道中をさせた方が面白からうと思ふ。所がこの三人は關西の

芝居を光彩あらしむるには無くてはならぬプリズムとしていつも一緒に居て貰ひたい人達だ。

鴈治郎が歿つたから、その後釜へ延若をもつてきて、梅玉、魁車は従前同様、その相手役をやつてゐる——では見物の気分も變らないし、第一それ／＼の御本人様が收まらないだらう。今後はさうした役所をリレー式に變へてみるのも目先が變つて面白いし、その間に思ひがけない收穫が期待できるかも知れない。その意味で今度の鎌倉三代記は鴈治郎の新盆に因んだと云ふ外に、色々の點で配役上の興味を唆るものである。

昨年好評だつた蜻蛉三人旅も、あの時既に今夏の續篇を豫約されてゐたがあの時は朝日新聞に同種の續き物が出てゐた折からとて興行的に安易な點も

あつたが、今回は無手で打つからねばならない。今度こそ作者と俳優の力試しと云ふ事になる譯だ。折から東京でも寶塚へ行つたとか行かぬとかのデマの中の友右衛門と猿之助で恒例の彌次喜多が演るらしい。袷を脱いで素裸になつたやうなのん氣な東の彌次喜多に較べて、この黄門記は何う碎けても碎けきれない窮屈さを覆ひかくす事はできない。彌次郎兵衛喜多八の穴を行く助さん格さんにしてからが武士意識をかなぐり捨てられない堅造揃ひだ。東の平民的なのに比してこれは貴族的とても申さうか。何れにしても非常時の演劇である。

黄門漫遊記とは稱するものゝ、實は助さんと格さんの行狀録と云つた方が當つてゐやう。前立ちのやうなこの二人にさんぎ働かせておいて黄門さんが

ぬつと顔を出して落ちをつける。彌次喜多のやうに何處迄術を外して行くのか見當のつかないやうな底抜けの面白味は求められないが、黄門さんがもう現れるか／＼と期待させる所に別種の興味であらう。その意味でこれは助さんと格さんのお芝居であるかも知れない。

藝達者な延若と魁車に思ふ様芝居をさせた後へ梅玉が悠然と現れてケリをつける。駄々つ兒共が暴れ廻つた部屋の後掃除をする御隠居さん。そんな感じである。

夏はお手々つないで仲良く涼み芝居やがて來ん秋にはと各々成算を胸に疊んで何れも鶴を削る活舞臺を今より希望すると云爾。



中座納涼歌舞伎上演

を描いて大いに面目を施こしたといふ事である。不肖南北はととても黙阿彌ほどでない證據に、近頃は全くの

「所作事作者」で、

「戀人形」腕久ものぐるひ「小猿七之助」——名題さひ忘れたが——それから真蒲がど

新舞踊

三笠と世之介・食満南北

「三笠と世之介」

に就て何かといふ道頓堀の編輯子からの注文ではあるが、それはどうか社長さんにさういふて頂きたいと思ふ。と云ふのは、一切社長さんの腹案で社長さんの命令で描いたので、いつも云ふ通りの仰せがきであり、タイプライターであり、忠實なる下僕であるからである。黙阿彌はあまり「どろぼう」を描いたので世間で「どろぼう作者」と冷笑されたが、終に「どろぼうがりの脚本」

繁華街に近く…交通至便・閑雅な和洋室！

モダン階上浴室新設

南地ホテル

南海難波新地戎橋停前

電南四一四・四四一番

— 宿 —

— 半 —
— 圓 —
— 圓 —

越半額

うやらしたのやら、辨慶と牛若がこないやらしたのやら、何やら彼やら、それも一切私の創案ではない、社長さんから

「今度はひとつ、誰と誰とにこんなものを描いてやつてんか、筋はこないこないで、こないなつて幕と云ふのや」

と一々筋立をして下さる。今度のやうに

「三笠と世之介」

といふ名題まで私がつけたのではない。社長さんの御命令で、これは區役所の代書人にも出来る仕事である。よし道頓堀編輯子の仰付けでも、今更らしく

「實は西鶴の一代男を描いて見やうと思ひましたな、九歳の時から六十歳までを一々場面をかへ、配する女をかへ、あれをかうして、此處でかうしてなんて、そんな事を生真面目な顔をして私は云ひ得ないのである。

例によつてこの所作事が評判であれば、社長さんと作曲家と、演者が豪いので、其かはり不評判だつても私は敢て責任は……とも云ひ得る。

さうしてどうも、最初に描いたのとなら多少其邊でカットされさうに思ふてならないから、いよ／＼ますますといふわけである。

昔から、脚本のついでに「所作」も描いた作者は澤山あるが、

所作のついでに脚本も描く作者は六代目鶴屋南北一人である。ついでだから、私の描いた所作を並らべて見やう、名題は大抵忘れてゐるが、

「戀人形」腕久ものぐるひ「兩浦島」保名ものぐるひ「戀巴」川上地藏「自然と人」小猿七之助「伏見人形」お七「五月人形」幻權八「白桔梗」新浦島「赤猪の子」灯取虫「イヤ馬鹿々々しいこんな事を數へたてるでもなかつた。

シリウタオネに核結

…科病柳花…

院医原藤

★ 番六三六二戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★

シリウタオネに核結



盛夏讀物輯・巡業地の話

突差の十分間・曾我廼家五郎

時は七月二十日

處は名古屋の歌舞伎座、私に例によつて四時に樂屋入り溢るゝ程の満員の光景はある商店の買切りだと聞き、部屋へはいると〇〇銘酒賣出し記念觀劇會と知つた。

私は全身電氣に感じた様にドキンとした。

理由は!!!

今から演る呼物の狂言は酒の害毒をいましめるのがテーマになつてゐるお芝居だ。

觀客全部が酒を賣らねばならぬ立場の人許り。

見せる芝居は酒は飲んでほ不可ないと主張する狂言。

一大正面衝突だ。

私としては氣がさして幕は明けられない。直ちに開幕中止を命じた。樂屋はヒツクリ返る大騒だ。

表と裏と連絡がとれてないとこんな大失態を演じる。

五分、十分、十五分、幕間は延びていく。何んにも御存じない觀客さんは開幕を迫る拍手の音が續いて行く。私は氣が氣ぢやない。

突差の間に狂言變更と一座の諸氏に命令した。

俳優、衣裳方、かづら方、囃子方、大道具等々電光の如く變更の狂言の用意にかゝつた。全部出來上つたのが僅に十分間を要しなかつた。

私は嬉し泣きに泣いた。

手足の如く働いてくれる一門の人達何等不平らしい顔もせず一座の大事と黙々として僅々十分間で他の狂言の開幕が出来る努力、良き部下を持つた私は日本の劇壇中の一番の幸福者である。おそらく日本現代の劇壇でこんな事の出来るのは曾我廼家五郎一座より外には無いと思ふ。犬も喰はぬ自慢話と、お笑ひ下さるな。昨日の今日、書いてゐる此ベンの手が震へる。 感謝合掌。

土佐の高知・都築文男

土佐の高知の、はりまや橋で

坊さん簪、買ひそなものよ

〆坊さん簪、買ひそなものよ

〆蹠が駒下駄買ひそなものよ

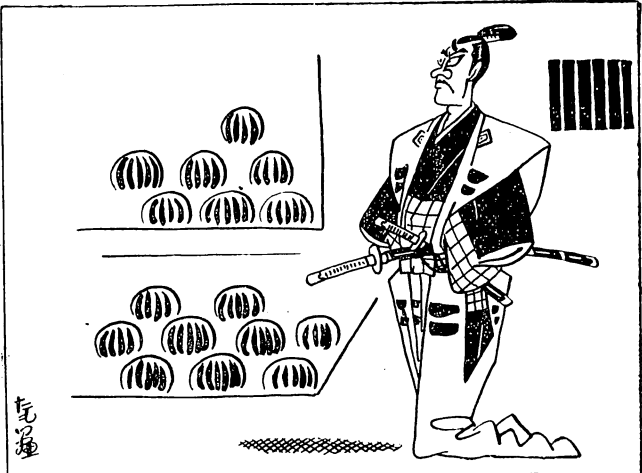
〆蹠が駒下駄買ひそなものよ

〆盲目が眼鏡を買ふの見た ヨサコイ

町廻りの人力車の上で、車夫が昔を語る、はりまや橋の古事と共にこんな俗謡を教えてくれた。舊正月を當込んだ、巡業地土佐の高知は、有名な鳴門の激流や室戸岬の荒波に氣を吞まれて、始めて行く人は勿論、経験のある者も大抵一度は躊躇するものであつた。

元日を初日に嫌がる男女僂を無理に連れて、海上もまづ平穩で無事に乗込んだ。船よひの氣分もまだ納まつて居ない、重苦しい體を町廻りの人力車に揺られて約三時半、しみく、旅役者の悲哀さを感じた。

初日を開けると客はうすい(狂言の評判は良いのに)二日目矢張り來ない。三日目、駄目、狂言を替えた。二の替りの初日、少しづつ殖える位で迎もお話に



夏芝居超軟扇子

大槻たもつ

(一)

「アーラ不思議やナー：今年は西瓜の當りどししッ」。大向ふの西瓜から聲あり「イヨイ果物家ッ」。

ならない不況だった。

とう／＼一週間の約束で買はれて行つた芝居を五日で打上げた。其日残りの二日を近在の高濱といふ小さな漁師町へ行つてくれとの事だった。契約は違うが、大きな損害をした仕打側も氣の毒だと思つて、座員に頼んで、心よく承知してやつた。

翌朝一座は高濱に乗り込んだ。此邊は夕方に煙花を打揚げて、芝居のある事を近郷へ知らせるのが習慣だった。

所が其日が大變な雨降りになつて、とう／＼芝居は開演出来なくなつた。

煮賣屋同様の料理店で旅館も兼業してるといふ〇〇屋に落つたが、何がさて知らぬ土地で旅の宿の雨の日と来て居るから、外出は出来ないし、ほと／＼閉口した。退屈凌ぎに挨拶に来てくれた座員を集めて、好きな雜俳の運座を始めた。

題は江戸振『洒落』で

『芝居に關する事』一切

記憶を辿つて少しばかり其時の名吟を紹介しやう。

一、茶屋場さらば (さらば)

一、世話場小町のなれの果 (卒塔婆)

一、揚幕助六 (揚巻)

一、釣物に花を飾れ (賣物)

一、所作事御覽に入れまするは(此處もと)

一、本讀迫れば惱みは果なし (夕闇)

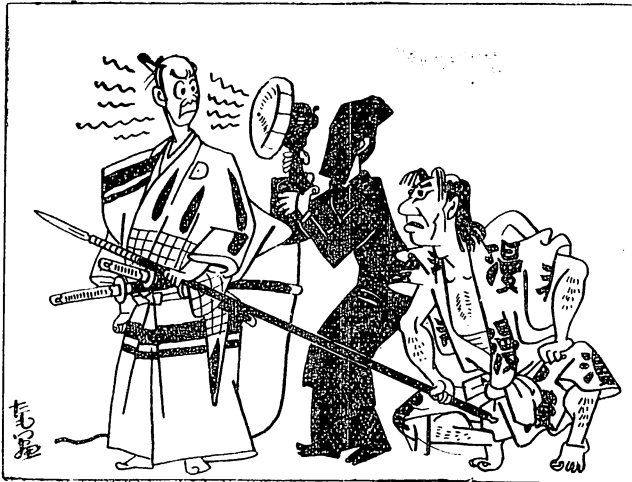
一、遠見八景 (近江)

以上かうした席吟にも可成優秀なものが澤山にあつた。

翌日は好晴に恵まれ、夕方の煙火の音に連れて、ドン／＼見物は詰かけて、見る／＼内に満員の大盛況だ。仕打の恵比壽顔も見られるし、舞臺の演技も活

(二)

めだたぬ程度で圖の様な俳優の暑熱緩和策如何なものでしょう。もつて多少なりとも貢獻するところあらば幸甚。



氣づいて芝居はより以上面白く見られるので益々好評だった。

二日目は朝から座員を連れて附近の名所古跡を蕪つた。例の坂本龍馬が太平洋を睥睨して居る銅像や、まるで繪のやうな浦土港の景色を小さな汽船で巡眺して打上日の樂屋入をした。

大入御禮の爲に均一にしたのが宣傳になつて、初日に劣らぬ見物であつた。贈「金壹封」都築文男丈ヒイキギと書いた大きなピラが棧敷の處へ貼出された。

此邊ではこれを花といつて無論ヒイキからの贈物です。間もなく表方の方がうやくしく其金一封を部屋へ持つて来てくれた○○家の○子と書いてあつた。

満更惡るい氣持もしなかつた私は表方への體と其ヒイキの客へ手拭と扇子など厚い謝辭を添えて贈り返した。

樂屋中は大騒ぎだ。座長の處へ花が來た。然かもそれが町第一の美妓からだ、そんな風評が立つてさあ何か驕れ、歸りの船にはボーイのチツプは勿論、夕食のカクテルにありついたらと景氣のいゝ話でもちきつた。

芽出度く打納めて翌日高知から室戸丸で一座は無事に歸つた。自分も土産話の中にも例の金一封を勿論封の儘で鼻高々と妻に渡した。妻は喜んで神様に切火と共に禮拜して、開けて見た……五拾錢銀貨一個!!

或る夜の出來事 ・ 曾我廼家小次郎

珍らしや七月の巡業は神都山田を二日間振り出しに松坂へ一日、こゝで御大に從つて先哲十郎師墓前へ追悼、涙新らに津も一日丈け、十四日が一寸一服十五日より當名古屋の歌舞伎座です。おかげで各地共満員。大入り喜んでゐます。當地で頗る變つた乞食を見ました。どんな楽しい處で飲まれたか知らぬじ



(三)

「不淨役人、下りおらうツ」と脱いだ蓆が吸取紙製ときたら、へゝこれも對汗策の一ツとしてあきまへんやろか?」

ールの空箱らしいのを利用した箱車へのつた中風の爺さん、之れ丈では何んの變哲もないがそれを引いてゐるのが餘り身體の大きくない白黒まんだら犬です。可哀相に全身の力を込めて引く。爺さんは不自由な手で棒をあやつり梶をとつてゐます。そして一定の場所？私を見た大須の觀音境内へつくと大は爺さんの前即ち自分の引く梶棒の後ろにつられた柵の上へのりますと爺さんがその首へザルをかけます。爺さんの例の憐れな聲は當り前としてワン公も泣きます。この可憐な姿 どうして素通り出来ませう。多くの善男善女？がそのザルへ恵み與へます。私もむろんその一人となりました。乞食の世界も世智辛く種々の戰術が用ひられるらしい。然し之れは効果百パーセントと思ふ、ワン公が主で人間が従の形も何れにしても忠義なものでこの犬のため生活が支へられる精根も盡くして主人を引き休む間もなく憐れみを乞ふて止まぬワン公の清い姿。

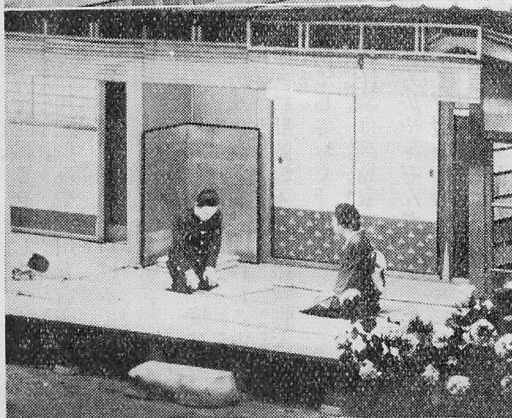
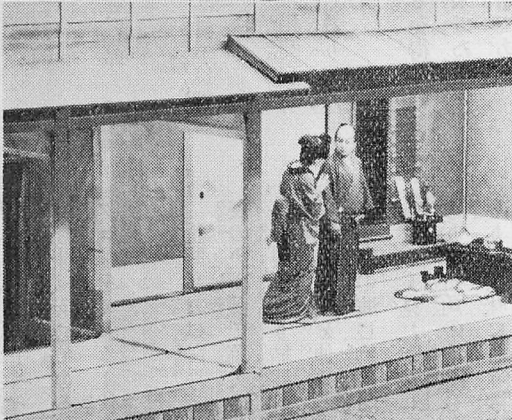
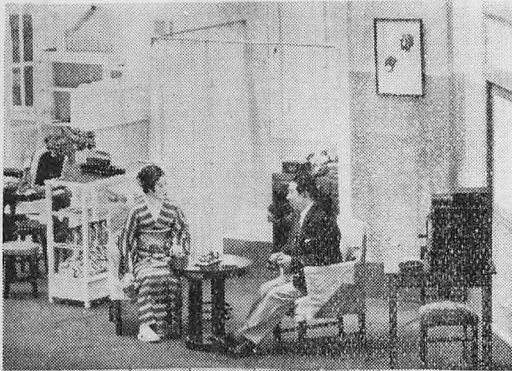
有名な澁谷驛の忠犬ハチ公は銅像にまでなつて世にたゞへられてゐる。彼れは博士を主人に持つてゐた。果してこの乞食を主人に持つ無名のワン公はどれほどまでになつてへられる？

等を考へハチ公の半分位より可憐なるこの犬へ私しが勝手にヨン公と呼び幸多かれと祈つて部屋入りをした其の夜の出來事です。

酷熱の暑さにお客がギツシリ、堪りません終演早々鶴舞公園へドライブして冷たいビールに五臟六腑を注射装置してつ

いでに胃の腑の御機嫌も伺つて好い心地に宿に歸つたのは十二時よほど過ぎた頃なのに隣り座敷へ急に艶かしい女の聲「オヤ／＼」と思ふと同時に油切つた男の聲「どうやら宿の風呂から上つた様子で鏡臺へ向つてゐるらしい女それに對しあくどい今の戰跡？の男の言葉、女の言葉それはとても申しあげられませんか。御想像にお任せしますとして兩人の推定年齢は男五十六、女二十六七と云ふ處でせう。聞いてゐる私の方堪つたものぢやありません。それが壁ならとにかく、唐紙一重です。誰れだつてコーフンすると思ひます。然し野暮に聲も出せず出るセキまでも遠慮する有様でいやはやみじめなものです。斯うして隣りに聖雄の士？ある共知らぬ彼老氏再び彼女へ二回戦？の態度に移つた様子、彼女も應戰の様子、華々しくも耳に入ります。モウ堪りません。聖雄敢然と立ちあがりベルを押す、おそいにかゝはらず直ちにベルの反應ヤガテ女中來て僕曰く「大阪の雜誌社から旅の思ひ出を頼まれてゐるすぐ書くつもりですがペンのインクが切れてゐるすぐ持つて來てくれ」女中去るトタンお隣りでも晴天の霹靂かコソ／＼「パタ／＼ガサコソやがて立ち去つた様子。女中の持つて來たインクをそのまゝに嵐の後の静けさで樂々に安眠、今朝心も軽くペンを取りまして貴誌の責を果すを得、一石二鳥之れも切に御依頼の贈物とつゝしみかしこみ御禮申す。

★ 記 劇 觀 座 各 月 七 ★



古 典 座 ●
 神 戶 松 竹 劇 場 ●
 歌 舞 伎 座 ・ 浪 花 座 ●

堀 川 哲
 大 橋 孝 一 郎
 西 尾 福 三 郎

★七月芝居抄

西尾 福三郎

先月以來持越しの評判芝居浪花座の二の替り景氣は如何？七月劇壇第一の問題は先づこれである。

舞臺上の成績は後で述べる事として、客足は相變らずの満員續き末日近い日でもぎつしり詰つて喘ぐ許りの大入りとは目出度い。

然し私はこゝでもまだ些少の疑問を残さざるを得ない問題に逢着した。即ち今月の見物はお岩様で來てゐるのか、それとも權三助十できてゐるのかと云ふ事である。

舞臺上の出來榮えから云へば私は躊躇なく權三と助十の出來を推稱するに吝でないが、見物の興味は怪談早變りの芝居の方により多く惹きつけられてはゐなかつたらうか。

斯うは云ふものゝ權三助十をよしとする客が尠くとも半數はあるに違ひないのだから、花形歌舞伎の人達は決して悲觀するに當らない。この残りの半數の客を卿等日常のファンとして獲得してしまへば、つまり極々物目

當ての客に若手特有の熱と力を認識させてしまへばそれから後は安心である。敢て今後鯉擱みや石川五右衛門のグロ味をボスター代りにせなくともやつて行けるであらう。

説聞八月は神戸で公演して新秋九月捲土重來今度は裏表の忠臣藏で萬丈の氣を吐かん意圖の由。埋れたる古劇の再興固より結構、それと共に壯圖廻々未墾の新脚本に希望の觸手を伸ぶるやう切望しておく。

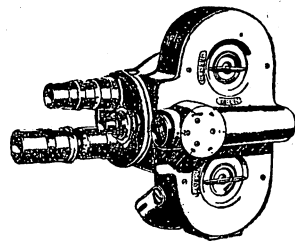
今度の演し物の内、四谷怪談は高島家のお家物として珍らしく見た。然し取扱ひ方がやゝぞんざい過ぎた憾があり、折角の珍劇らしい味が稀薄になつてしまつた。早變りの興味に許り觀點を置くのは少し考へ物だと思ふ。吉三郎の伊右衛門には今一息練の太さがありたく霞仙の宅悦は三枚目意識が濃過ぎはしなかつたか。

朝顔日記は床に注文したい個所があり、それらに較べたら、權三助十は皆のび〜と屈托なく演つてゐて比較的ミスが少いと云ふ點で佳作だつた。演出の山上大人に敬意を表すると共に、かつての青年歌舞伎に大森痴雪氏が主事してゐた如く、この一座にも幕内に責任ある有能の士の加盟を望んでおきたい。

歌舞伎座の方は先月東京大新派の後をうけて、又ぞろ水谷梅島の來演でどうかと思はれたが、樽屋おせんや世に出ぬ豪傑等で、先月とはや、面目を變へたのでともかくも相當の成績を挙げたらしい。

水谷の諸役の内、おせんとお雪は追に確かな腕を見せてゐた。壽三郎の伊助は初め豫想してゐたよりもすつとよく、強氣で底力のあるこの人の一面に、斯様な弱氣の役所で成功してゐる半面のあるのは興味深い點である。

久し振りでみる梅島が愈々淡々たる風韻を滲み出してゐるのには一寸驚ろいた。この人の年輩でこゝ迄素に返るのは果してよいか悪いかは別の日の問題として、かうした傾向が他の同輩新派諸優と渾然一致しない事はさもあらうと思はれる。子故の春に於ける演技が梅島としては充分に優れたものであり乍ら、他の俳優との調和と云ふ點で何となく水に油の感がなくもなかつた。もし新派の中に伊井系と云つたやうな一類があるとしたら、それを代表する人はさし當つてこの人あたりが第一人者かも知れない。梅島の藝の中に伊井的な或物があるとしたら彼が容峯歿後の新派界から獨立して敢然孤壘に據つてゐる心意氣に悲壯な心情を感じる次第である。



フィルム

十六ミリ界の 最高峰

未だ會てフィルムカメラで一呎のフィルムが浪費されたか？フィルムは映畫になると同時に最も優秀なるカメラマンを兼ねボタンを押し給へ賞下のなされる事は唯それだけだ

(全一國一流カメラ店にありカカロタ進呈)

BELL & HOWELL CO. U. S. A

★菊五郎の三役

大橋孝一郎

どう云ふ廻り合せと云ふのでせうか、今年ほどよく六代目の芝居を見る年はありませんでした。乃ち、二月の南座、三月の東京、五月の大阪、そして七月の神戸——とこれでは隔月一回の割で六代目を観劇してゐることに なります。従つて私の頭も、この頃ほど六代目の印象が より強く彫刻されてゐることはないのであります。殊に 七月の神戸の如きは殆ど菊五郎一座の人々のみに限られ 居りました爲、餘計に此の一座の持つ特色が鮮明に而も 色濃かに滲み出て居りまして、眞とに氣持よく觀劇が出来 たのであります。近頃はとかく申せば顔ぶればかり を揃へて賣りたがる所謂豪華陣の興行が流行致しますが これにはその人その人の各優の持味が充分に出し切れないと云ふ缺陷がありまして、狂言の排列なども兎のウソ コ式になり結局印象の薄い芝居しか出来上らないのであ りますが、七月の菊五郎の如く、その一座のみで興行さ れますと、しつかりとその人の臭ひが判つて、狂言なぞ も理想的な排列となつて、その上場代も豪華陣ほどにお

高かくなく、返つて好劇家には有難いわけであります。

開幕劇にだんまりを据え、義太夫狂言、所作事、新作 とこの理想的な番組が四時半の開幕ですから、時間の點 も眞とに結構で御座いました。六代目は、御承知の通り 猿廻しの與次郎と、舟辨慶の静と知盛、暗闇の丑松の丑 松とこの三役を勤めましたが無れも數回手にかけて十八 番物でありますから、今更私如きがその演技に就いて申 上げるべきものを持ちません。たゞこの三役が今日の六 代目の三ツの演技の方向を示し、如何に廣汎な技藝の 範圍に彼が恵まれてゐるかを知つて頂きたいのでありま す。

堀川の與次郎は野崎のお光と同じく、六代目が好んで やる義太夫狂言の新演出物で、と云つても決して悪い意 味での新演出ではなくして、義太夫狂言に眞實を基調と した一抹の近代味を織込み而も古典の味を忘れずにツボ に嵌つて動く彼一流の舞臺です。尤もこれは父五代目か ら譲られた型も交つて居りませう。しかし、明治に活きた人間と、昭和に活きた人間と、同じことを繰返してゐるにしても、其處には何か大きな溝が横たはつてゐなければなりません。殊に六代目の如き演出家としての素質

にも充分恵まれてゐる人が演ずるに於てをやです。歌舞伎は滅亡すると云ふ人がありますが、決してそんな馬鹿げたことはありません。歌舞伎はむしろ此の様に、その時代時代に適合する様な工夫が施されて進展して行くものなのであります。たゞ問題は菊五郎の様な人材が次の時代に於て果して現れるかどうかと云ふことが疑問なのであります。此の點、次の時代に活躍される若手俳優の大いに一考して頂きたい處だと思ひます。

所作事舟辨慶は四五年前京都で上演されたときよりは印象強く拜見しました。矢張り所作事などは、芝居よりも一層一度よりも二度、二度より三度と回数を重ねて拜見すればする程、確かり舞臺が判つて来るものと思ひます。殊にかう云つた本行物は、能を知つてゐると否に依つても亦大變面白さに隔りが出来て来るもので御座いませう。六代目は尤も本行近く（殊に靜の間）舞つて、而も少しも本行臭くないところが流石であります。一ツのピリオドも疎かにしない銜氣のない舞ぶりは、故園十郎以上の名手であると、しばしば古老から聞かされてゐるところであります。後ジテになつてからは、顎を少し突き出し氣味である彼のくせが、よくあの知盛の隈取りと

ケネトン号

萬人愛好の撰良車



國産品中の完璧

是非御愛乗を

市内特約店ニアリ

株式会社 大澤商會
 京都市三條通小橋四

マツチして實に憎々しい効果を擧げ得たのでありました。幕外のひつ込みは片唾を込むまもない鮮かな引込みで、長刀の輕るやかな扱ひ方、小廻りの美しきなど、あゝ此の人なき後に於て、果して誰が此の藝術を繼承して行くのでせうか。

暗闇の丑松は徹頭徹尾六代目の演技に依つて活かされてゐる芝居であります。今假りに此の芝居の成績を十とすれば、脚本は三分で残りの七分が演技の力量であると申しても過言ではありませんまい。誇張をされた彼の演技は映畫的にもまた一考すべきものがあります。此處で先刻も述べた演出家としての六代目の價值がふんだんに光彩を放つのです。私は此處に至つてわざわざ神戸まで出掛けたことが決して無駄ではなかつたことをこよなく嬉しく思つたのであります。

(七月二十一日記)

★ 古典座を觀る

堀川 哲

若き俳優のかうした研究團體の少ない大阪で、此の古

典座はもう第八回の公演をする程になつてゐる。嘗ては片岡我童氏一門の小邦劇座が在つたが、我童氏が東京に移住するに及んで大阪から事實上その姿を消してつた私は以前から大阪の若手俳優諸氏のかうした研究團體の少きを歎き、且つその一つたりとも多く誕生することを望んでゐたものであるが……尤もその財源なり指導者なりに難色が介在する爲めに、出づべきものが出ないのかも知れない。といつて、——いや、けふはさうしたことをいふのが目的ではなかつた。かうしたことに關しては他日の機會に愚考を披瀝することにしよう。

今度の狂言は「一條大藏卿」くる髮(大西利夫氏作)

「忠臣いろは實記」連獅子の四つ。福助以下それこそ文字通り汗みどろの奮闘をしてゐる。各優の日頃の精進に加へて梅玉氏の補導及び大西利夫氏の指導とに因つて、觀る者が慾さへいはなければ結構な芝居である。「觀る者の慾」は古典座自身それは大成への途中にあるものであるし、又各自が自覺してをらるればこそ、かうした研究團體が永續して行くのであるから、私は敢て「觀る者の慾」を並べ立てない。然し、反面よりいへば、さうした研究團體なればこそ、その育成の爲めに、一應苦言を

呈することが禮だといふことも首肯する。それ故に、私は唯一言だけ苦言を呈する。それは狂言の撰定である。

第三の「忠臣いろは實記」これは今度上演さるべき筈であつた、「鳥邊山心中」と急に變更されたものだけに、手近な物を選ばれたものであらうが、それだけに、かうした研究團體で上演さるべきものでは決してないと思ふ第一内容がなさ過ぎる。これは既に當事者の諸氏が自覺されてゐることであらうと思ふから、諄くはいはない。次に、第二の「くろ髪」である。若し、此の狂言をも古典として取扱つた上で上演なれば、私は贅言を弄しない。然し、聊かでも、現在の若い観客への贈物だといふ考へが當事者にあるとすれば、全然誤つた狂言の撰定だといはざるを得ない。あの狂言の何處に、現代の若人を捉へて離さぬところがあるだらう。恐らく、何の感動も何の刺激も受けなかつたのは、私一人ではあるまいと思ふ。二十年以前の青年男女なればいふ必要はない。古典座といふ座名にとらはれて、狂言の全部を古典的なものを選ぶ必要はあるまいと思ふ。狂言の一つに複雑な現代人の氣持を取扱つた脚本を上演することは、翻つて若き俳優自身に現代人を理解せしめるいゝ勉強の機會

だと思ふ。かういふと大變可笑しく聞こえるかも知れぬが、現在大阪の若手歌舞伎俳優諸氏で、現在の新しい脚本を演りこなせる人が何人あるか？ 残念ながら、疑問だと思ふからである。幸ひ大西利夫氏がをられることであり、又、さうした脚本に非常な理解力のある梅玉氏が補導してをられるのであるから、此の實現は決して難事なことではあるまいと思ふ。切に希望して已まない。ではその脚本を何處から撰ぶかといふ間があるに違ひない。東京の雑誌を演るまでもなく、今度「新劇壇」といふ脚本雑誌が大阪に誕生してゐる。然も、その掲載脚本は現代人と共に生き、共に悩む「新しい良脚本」といふ主旨であると聞く。されば、古典座當事者の安心して撰ぶべきものではあるまいか。(妄許多謝)

本誌の年極め御購讀を！

1ケ年

3冊30銭

すぐ小爲替にて編輯部へ

大坂中座納涼歌舞伎

續蜻蛉三人旅山陽の巻

・ 金二十場・芝居物語・



助さんの佐々木助三郎と、格さんの渥美格之丞の二人をお供に連れ江戸を發足した黄門さん、昨年は湊川の土中から風雨に打たれ荒れ果てた貧しい墓石を見出して「嗚呼忠臣楠氏之墓」を建立しましたが、其他は至つて平凡な旅で遺憾な點も多々御座いましたに不拘皆様より絶大なる御喝采を頂き、且つ其の御支援を受けて本年其の第二コースに就く事を得ましたるは甚だ光榮と存じます次第、本年は福岡まで参りますが、恐らく皆様方の間にはもつと事件に銳利なるメスを奮い、同時に國々の風土に觸れさせよと仰有るでありませう、然し何と申しましても、暑さの砌りで御座いますから大抵は御用捨下さいまし、そして第三コース第四コースと回を重ねるに従ひ黄門さんの旅もイミシンに成る筈で、又風土のかほり豊かに成て参りませう、何分まだ三人は、大坂京都を見て居りません、來年は何處を廻るやら前途にはまだ種

々な事件が山積の形です、然し黄門さんや助さんや格さんが幾等藻掻うとあせらうと蜻蛉三人旅は皆さんの御支援が無くては續けられませぬ、故に此先き三人が何千何萬里を踏破するか、其の成績に御期待をかけられ、ゴールラインに入るまで不斷の御支援に預り度く敢而懇願いたします。

梗概

鹿しまだちは兵庫 楠公の靈を祀る造營を終り、三百五十年祭を執行して朝まだき、宿を立出た途中暗の中から現はれた花賣娘、荒野の中に丸一年やもめ暮らしをした助さん飛だ罪作りをして御隠居様の御機嫌を損じ、飯より好きな酒を對じられて終ひます、悄氣きつた助さん、黄門さん格さんの後に從いて

播州高砂の松

に差しかゝります、濱の茶屋に休息する女旅。黒田の奥方お登勢の

方が長子菊千代丸と同列で初の國入をする道中である、用人の山田喜内、中老の松尾、其他局腰元警固等が附添、女乗物も立派に行列はやがて出て行く、鳴り渡る相生の鐘、三人はお辨當包みを解た、處へやつて來る江戸職人彌吉と北六、京見物の足を伸ばした播州巡り、明日は至の津から讃岐へ渡り琴平様へ參詣と云ふ寸法である、茶見世の小俣卯之松が沖釣をして來た鯛を、親爺久七早速商賣物にして酒を賣る、いゝ酒だと江戸っ子無性に嬉しがり、駄洒落交りのおしやべりで御生國はどちらではれから何處へなぞと助さんに話しかけ、まアお近づきのお印しだと差た盃がキツカケで、飛んだお酒の封印切をする、處え奥の亂痴氣騒ぎ、土地の武士松永平四郎、梶田甚六、木村權兵衛の三人が無体な悪さを逃れて娘のおしんが逃げて來る、此の三人は何かと引懸りなつては勘定を踏み倒す當習者なのだ、格さんは是を懲らしめ黄

門さんは罪狀を落書する、助さんはもう他愛も無い。

黄門さんが高松に居る實子の讃岐守に會ふ爲めに、室の津から船で渡る。

瀬戸内海の夜霧

黄門様が旅に出た目的の一つは實子である讃岐守の藩政振が見たかつたのです、明朗な月を仰ぐ船の上、船長毛刺九右衛門の招きを受けた格さんと、京の小間物屋の小松屋惣七、南蠻渡りの益が次第に廻つて格さんが好い氣持さうにウツラ／＼としたのは胸にいちもちつあつたからで、戀女の小女郎を身請の爲め博多へ急ぐ惣七の心は歡喜で一ぱいでした。

乾分の嘉平次や市五郎、傳藏など、旅寢の夢の面白さと頻りに水をむけるので惣七もツイ迂濶口をすべらす柳町の惚氣、九右衛門は汝れ戀敵か、と心密かに叫びました、惣七は胸の間へ歸つて行く、あとは夜霧が一ぱい立ち込め視界

はずつかりせばめられる、九右衛門は船廻と下知をし、そして外にも何か命令けます、格さんはムツクリと起き直り毛刺を捕えて強談判。屋島の沖にかゝり乍ら船を廻した理由を云えと、其の間に惣七が嘉平次に追はれて來た。

實を云えば九右衛門、呂宋から羅暹にかけウント拔荷を買込んだものゝ役人の目が光て荷揚の出來ない處からは非無く飛脚船を裝ふてゐたものゝ懐中は行詰つて、次の港人には柳町に黄金の花を散らして小女郎をはじめ子分達の合方のこらず身請をする約束だつたが其の實行の出來ない間に、惣七が身請に行くとき、ごうしても其のままにして置けなかつた、其處で海賊と早變りをして第一に惣七の胴巻を狙たのであります、何分板一枚下は地獄の海上であるから旅人なぞ一と脅して意のままと思はは毛刺一黨の誤算でありました遂々格さんの爲めにお繩頂戴と云ふ結果に成りましたが黄門さんは

御所持の金を全部出して諸人の迷惑に成る事だからおとなしく高松へ船は着けよと穩やかにさとしませ、毛刺は承知しません、其處で格さん最後の切札を出して、黄門光圀卿なるぞ！と叫んだが、一向に利目が無い、其のうちッシーンと云ふ大音響と共に船は忽ち傾いた、衝突である、乗合の旅人は悲鳴をあげて右往左往、高いびきて寝てゐた流石の助さんも仰天して甲板上に馳け上つて來たが、船は用捨なく沈んで行く。

海底の亂濤

それはもうお話には成らない、蛸やかileyや鯛やすゝきが、珊瑚樹や海草の間をスルリ／＼と遊泳する、恰も水族館の水槽の中に黄門さんと助さん格さんが必死でない必生の努力をするのであります。

藝備國境地藏峠

お地藏様のお慈悲でも無いでせ

うが、兎も角も生きのびた三人は今疲れ切つて此の峠の清水の湧き出る崖下に休んでゐます。凡天下の副將軍もルンペンも俄の苦しみは同じでせう、否もつと深い、其處で盜泉の水も魅惑を投げます、遭難から無一物に成つた三人、土地の代官又は領主に御用を仰せつけられて：：と格さんは進言したが零落のドン底に沈んでも黄門さんは、まだ領主や地方大名の救助を求めべく後日の睨みの聞かぬ事を恐れました、それよりも能役者だと云て名主を頼み、村方で能興行を勸進させ：：窮餘の一策、黄門さんが智恵を絞る折も折、通り合せたのが女歌舞伎の一座で、一行の中の太夫元浪花屋仁吉と座頭らの坂東鯉昇、それから立女形の中村小枝、狂言方の勝重作、床山のおのぶに至るまで、皆遭難の不運に同情しない者はなく、一同は僅か宛出し合つて此の不幸な三人に恵みます、黄門さん此のお恵みを受ける事は非常に苦しかつたで

せう、助さんも格さんも泣き出します、それは嬉しいのか情けないのか……三人は商賣を問はれました、黄門さんは迂かりと手前は……と合手の云つた通り男歌舞伎の藝人ださ……處が向ふは眞に受けて兎も角も一緒に來れえ……と見そぼらしい三人を連れて廣島へ乗込だのです。

廣島芝居小屋 幼女の行衛

處が黄門さんは、遭難以來の疲れで病氣になりました。一方一座の方では、出し狂言の夜討會我に十郎役を勤める女優が臨月で然かも舞臺途中に産氣づいて、興行に支障を來たす事になりました、其處で黄門一行を俳優と思ひ込んだ太夫元の仁吉はタツターと暮、會我の討入だけ代役に立て呉れと頼み込みます、一行の中の助さんは黄門様のお相手でお能にかけては觀世、寶生を極め、鉢の木や夜討會我は尤も得意とする處でしたが

歌舞伎狂言と云ふものはまだ會而見た事もない仁でした、格さんは問はれるまゝウツカリ能狂言を土台にして歌舞伎狂言の形式を説明しましたが助さんはそれに依て能狂言も歌舞伎狂言も大差ないものと判断して仕舞ひました、即ち助さんは此の代役を引受ける可く悲痛な決心をいたしました。驚いたのは格さんと黄門さんでしたが既に矢な弦を放れた形です、助さんにして見れば、太夫元が三兩や五兩は前貸しをすると云た言葉から其金を得て黄門様の醫療に宛てやうとする了簡でした。けれど、能における會我狂言を悉く空んじてゐた事こそ不幸でありました。

「其の名も高き富士の嶺の／＼と、雨音に大小入りて走り出る討入りには餘りにもかけ離れた助さんの演出が忽ち舞臺を混亂に落し入れた事勿論です、黄門さんと格さんはドロソして終ひます、あとに取りのこされた助さん、殴られたり蹴られたり散々な目に遭ひま

すが、其の間に惹起る恐怖事件、立女形小枝の愛兒が惡漢の爲めに渡はれました。

今晚四ツ時八幡川土手下二本松へ紙にくるんで金貳百兩を置け若し警察へ……では無いでせうが、上役人へ訴えたら一座は皆殺しにする……と云ふ一流の脅迫状まで舞込みます。

安藝八幡川嬰兒奪還

之れが取戻しに向ふ助さん、蓋し適任であり頗る信頼するに足り、果して覆面の浪人二人がアナヤ害せんとする嬰兒を助さん奪還いたしました。

お歡びなさい、あなたの子供は取り返してあげました、と助さんの知らせに看視役に従て來た床山のおのぶや狂言方の勝重作が、母親の小枝を大急ぎで連れて來ました。

然るに……全く然るにでありませ、子供は小枝の子では有りません、奪はれた子は當年七歳の女の

子であります、今助さんが奪還したのは當歳の男子だつたのです、助さんはゲーツアと成りました、小枝は悲慄に暮れます、だが助さんとしても受け取り手のない赤ん坊を背負込んで、途方に暮れてしまいました。

周防岩國木賃宿、深 夜の捕物

落ちのびて黄門さんと格さんが泊り合せた木賃宿の主人の居間の密々話、浪切三次と云ふ放浪の惡漢が、亭主安兵衛と話し合で打た子供拐渡の一と狂言は首尾よく行つたものゝ指定した二本松で喰ひ違ひ待てご暮らせども來なければ金も置てなく却つて惡漢自ら心配して、子供の親を尋れ廻るやうな結果に成たり其の暇に夜が明けて己ぬが身が危く成たので引返す途めぐり合した人買りに三兩で叩き賣たと……、それから三兩の分け前争ひに成る處え、我が子の行衛を尋れて小枝が太夫元の仁吉と

共に此の宿へ踏み込み、黄門と格さんを捕り押へましたが、其れに依り既に幼女は賣られた後なので小枝は狂しい程嘆きました、此の小枝は元黒田家の腰元で、同家中の榊田縫之助の妻と成りましたがお側用人の門田彌十郎の横戀慕から良人は悲しくも馬場先の暗に騙し討たれ、自分は其の毒手に捕はれんとしたのを、仁吉の爲めに助けられ、それから六年、女歌舞伎の一女優として隠忍したのは我が子の成人を待つて良人の恨みを晴らさうと云ふ一念で御座いました仁吉は元榊田の仲間でありました故、小枝母子をかままつて共に敵を討つてゐましたが此の不幸な出来事は其の大望を根底から破壊し去つてしまいました。

下の關沖の漁り火

一方黒田の奥方も一子菊千代丸を曲者の爲めに奪ひ去られ、中老の松尾、用人の喜内と共に悲嘆に暮れてゐます、警固の人々は八方

へ飛んで若君のお行衛を尋ねましたが、何の手懸りも無いので、三人は隆政公への申譯には壇の浦から身を投じやうと決心さへいたしました、其處へ助さんが子供を背負て：空腹から八釜しく泣き續ける赤ん坊が黒田家の御公達であらうとは殆んど信じてる事が出来な程でした、助三郎は喜内の爲めに捕えられます、其處へ旅姿で黒田家の腰元早瀬が通り抜けれます、それは下り道中にある奥方へ或る重大事件を密告の爲めでしたが、折しも覆面した多数の武士が、抜刀で奥方の一行を捕巻ます、其處で助さん空き腹を抱えて武勇を現しゆくり無くも黄門さんと格さんに再會します。

博多柳町暴威潰滅

黄門の命を受けた格さんは、小枝を引連れ幼女おそでの行衛をたづね、柳町へ參りました、一方瀬戸内海で遭難した小松屋惣七も小

女郎戀しと忍んで來ますが、座敷では又毛剃九右衛門が乾分の嘉平次、市五郎、傳藏等と共に大盡遊び、コラツ右衛門！、意外や格さんの出現に膽をつぶした一行逃げんとしたが取押えられ、此處に轉向を誓ひ小女郎を身請して惣七と添はせる事になります、此の小女郎の手許に四五日前から預けられてゐた禿しげりが格さんや小枝が尋れる愛兒おそでいありました。

福岡城中明鏡の輝き

此の日は妾腹の高千代丸君のお箸揃の祝日でした、其處へ奥方と共に乗込んで來た黄門さん、隆政に面會して助さんをして繩付の平松久馬を引立てさせ、證人として腰元早瀬をも呼び出し悪人門田彌十郎、荒木三左衛門、小倉儀助、老女浦邊等の罪狀を訊します、即ち愛妾お美代の方に高千代丸君出生したのでお付添である是等の人

々は徒黨をつくり、奥方一行の下り道中を途に擁して長子菊千代丸を奪ひ殺害すれば奥方は自滅する其處でお美代の方を正室に直し高千代丸を世繼にせんとしたもので早瀬は我が實父の罪を訴えた不幸を詫びて自殺します、そして門田彌十郎は：

城外馬場先の本懐

隆政の計ひに依り、小枝母子、仁吉を馬場先へ召し出し、黄門の立會で助さん格さんが助太刀をして門田彌十郎を討果す、山陽の巻の終點めでたく、打出して御座います。



カットは黄門劇記念スタンプ



鎌倉三代記解題

世話垣鈍文

鎌倉三代記絹川村の段は關西の好劇家には忘れることの出
 來ない狂言である筈です。と申しますのは、成駒家の最後
 の舞臺が此の狂言の三浦之助であつたからです。此の月の中
 座では「鎌三」が出ますが、キツトお客様の九〇パーセント
 までは三浦之助の出に成駒家を追想されることだらうことを
 信じて疑ひません。

扱、此の狂言には同じ題名になる二つの作が御座いまして
 一つは享保三年正月二日(二百十八年前)から豊竹座で上演さ
 れた紀海音の作になる五段續きのもの、今一つは天明元年三
 月二十七日より(百五十五年前)江戸肥後座に上演された十段
 續きのもの、とこの二つが同名の狂言なのでありますが、絹
 川村の段で皆様にお馴染深いのは後者の十段續きの方なので
 御座います。

處か此の淨璃瑠の作者は未だに不明で御座いますが、その内
 容が「近江源氏先陣館」の續篇とも見做されるところから「近
 江源氏」の作者である近松半二が、此の狂言の作者ではないだ

らうかと云ふ風な説が立てられてゐるのです。今此の作の内容(題材)に就いて考へて見まするに、坂本城を大坂城に、石山の陣を茶臼山の陣に、北條時政を徳川家康に、源頼家を豊臣秀頼に、高綱を眞田幸村に、三浦之助を木村重成に、時姫を千姫に置きかへてみますに、此の事件は全く大阪夏の陣とそのまゝの世界であり、これが題材となつてゐることを容易に肯定することが出来るのであります。

歌舞伎の舞臺で度々演じられます緋川村は丁度七段目に相當するところでありまして、文政元年二月(百十八年前)の中村座、文政七年(百二十一年前)の大坂角座などが古く上演記録となつて居ります。原本通りですと、「千代萩」の飯焚きの様に、時姫が豆腐を買つたり米を磨いだりするしぐさがあるのですが、近頃は時間の短縮と、女形の大物に恵まれてゐない爲に、メツタに最初から上演されたことがありますね。

三浦之助は水々しい若武者ですが「血汐を隠す着替の鑑」とある通り、重傷を押し隠したいいたしさが見えなければなりません。最初門口にたふれるところ 井筒に足をかけて高綱を

招いてからのきまり、なぞが見せ場になつてゐます。

時姫は三浦之助に水を呑すのに、元來なれば口移しが本眞ですが、一寸エロツぽいので困ります。扇の房に水を含めて口に當てがう型もありますが餘りにこれは上品すぎる様でもありません。

高綱は藤三郎の間は極くつまらぬ役ですが、一度本性を表してからは、斷然此の芝居を一人で背負つて終ふ觀があります。昨年の京都の顔見世で吉右衛門は「地獄の上の一足飛び」で腰を浮かして手を差しのべ、舌を出すと云ふ至つて古風な型を見せて呉れましたが、此の月の延若はどんな見得を切るでせうか御注目願ひたいところで御座います。

(註) 緋川村を八ツ目とも云ふのは、原作第二段の内の松原の作りを第三段の勘定に加へた爲でありまして、此の勘定で行けば全曲は従つて十一段の淨瑠璃となる譯であります)

△右、日本文學辭典、歌謡音曲集、日本百科事典等に據る。

家庭劇補強工作論

— 家庭劇の進むべき途は —

西田眞二郎

「家庭劇の進むべき途は——」

斯ういつた問題を投げかけられると居住るを正さなくてはならないやうな気がしてならない。この頃なら先づ一風呂あびて浴衣がけて氣安く見に行きたいのが家庭劇である。

ク家庭劇は面白いですね

ク家庭劇はタメになりますわ

私の知つてゐる中年の夫妻は家庭劇のファンであるらしい。幾度か斯う私に話しかけて見て来た狂言の筋で面白かつた部分をよく話してくれた。

面白くてタメになる……あゝ何かの

廣告がよく使ふ文句だ。

ク面白いただけで充分なその上にまたクタメになるクといふお剩りがあるのだ。家庭劇の商品價値はこれで充分だと私は思はせられるのである。

家庭劇の見物は更に何を要求するのか。家庭劇自身何かの意圖があるのか。最近傳へられるところに依ると作者であり俳優でもある十吾氏が五郎劇の作者となつて家庭劇を去るとやらいふ事である。そしてまた天外、淡海らで新しい喜劇團の編成を見るとかいふ事である。一時解散状態に陥つて更生して數年と経たない中に内面的に崩壊の危機を醸成する。ガツチリ組んでゐる

やうでも何かそこには不純な、弱點といつたものがあるのではないか。

劇團の内部には常に何か事があるものだ。家庭劇に何かありさうだぞといふ事を仄かに聞いたのは今年の春であつたと思ふが、それが最近十吾脱退、新喜劇團編成といふ具體化しない形で進んで来る。事の真相は私は知らない。潰して新しく組み替へて見るのも氣が變つていゝだらう。暫く崩し切つて了ふには惜しいが崩れて了はなければならぬのなら已むを得ない。

家庭劇の味はもう味ひ盡されてゐないとも限らない。それがファンであればある程。もう最初ほどの興味は持つ

てゐないだらう。フリの客は確かに飛ぶつくが、常連はもういゝ加減に倦怠してゐる。その倦怠性にホルモンの注射を試みるのは中々六つかしい。何故ならク家庭劇に何かありさうだゝなどいふデマ？が飛ぶのは劇團全體が緊張を缺いてゐるからなのだ。

十吾、天外らの喜劇派と小織、石河東その他の新派側との對立が根本的にこの劇團の禍因となつてゐるからだと、いふ説は創生當時から家庭劇診斷の要諦となつてゐるが、勿論それもあるに違ひなからうが、何よりも恐しいのは今言つた劇團神經の弛緩だ。或は云ふク中だるみ々であるかも知れない。ク面白くてタメになるゝといふ一人の觀客の心は百人千人のものである。家庭劇は折角いゝ評判をとつたものであるが家庭劇の進むべき途があるとすれば、

それは最初の緊張を取り返すことだ。去る五月の中座公演に家庭劇は天外と十吾との合作脚本を殊更に呼び物とした。即ち「裏街の友情」と「花嫁花聲」の二つの合作篇であつた。それには何かの意圖があることを感じさせられた。私はその時の劇評にたゞ漫然と次のやうに書いた。

俳優自身が脚本を書いて自ら演じるといふ事は一つの強味でもあるがまた一面弱味でもある。五郎劇がその好適例であつて、何處までも自作自演で行かうといふ所に時々破綻を見せて居る。家庭劇が十吾、天外の才を閃かせて合作を賣物にしてゐる今度の意圖がより濃厚に十吾臭と天外臭とを強調しやうといふ外には何等の意義がない。併しこの兩者の臭味が家庭劇の味の大部分を占めてゐる

とすれば、これは取りも直さず家庭劇補強工作の意味もあるのであらう。

これは勿論私の獨斷であるかも知れない。併し私は家庭劇にはピンと張り切れないものゝ弱さを感じてゐたからである、どの狂言だとは言へないが、纏まりのないまゝに有耶無耶の裡に幕にして丁ふやうな脚本や演出をよく開幕劇などに見ることがある。舞臺で遊ぶと云ふ感じがして私などは嫌ひだ。ふざけ過ぎると云ふ難もある。演出者なり舞臺監督の工作がどれだけ俳優達に容れられてゐるかといふ疑問も投げかけておきたい。

要するに家庭劇の前途は行詰りだ。あるがまゝの姿に拍手をかけることだと思ふ。十五氏の腰の伸びることもあらう。(十年七月)

新 人 作 家 論

— 不 即 不 離 之 妙 諦 —

那 津 九 一 翁

水を割つた屋台酒、さては焼酒やなぎかけ等を、ぐでんぐでんにあふつておきながら、一朝事有ると飯が食へないとおつしやる。パンを與へよをスロ—ガンとした一つばし愛國面も此頃ではシヤレにもならない程カビになつた處で芝居畑では有無人材論が十年一日の如くソヨソヨと吹いて居る。春宵千金夢、此風は強く吹かぬがよく、さりとて、残んの花がそよがいで興が薄い。と云ふので、折にふれては「作家が居ないか」演出家は生れぬか」ああ

よき脚本家は「ござらぬか」と人工風をおこして居る。が實の處、劃期的作家や演出家が一陣の風になり、其新銳の長刀を振りかざして出現しては困ると云ふのが、正直、春宵梨園居士の肚の内では無いか。どうぢや。どうぢや。

舞臺に乗らぬ脚本を百本も書かうよ、たつた一本の赤本をお書きやれ、其方が世の爲でおじやるとは或、デレツタントの至言ぢや。此頃の劇界は、文明開化の分業主流に乗つてどうも藝事で無くなつた。殊に關西では大成駒家を最後として、名人稼業の風も他界したのでは無からうか。松竹プロツク

に縛られながら、休演になるのをみんなびくびくして居る。藝術家なぞ殊に空氣と水だけでは生きられぬものぢや水にだつて此頃は使用料がかかつて居る。たゞでは無い。

脚本は鉢の中の金魚である。脚本作家の氣概は北溟の魚である。が、待てしばし、脚本作家の肉體は宵つ張りの朝寝坊、男の肉體に包んだ有閑マダムの心境的存在である。節約と節制は、其作品のプロットを貧困にし、或は非大衆的なものにしてしまふ。其處で此北溟の魚に如何にして鉢の金魚を生ま

せるか。其處はそれ、たんまりとした地獄の沙汰ぢや。此頃脚本が無いさうぢや。新人が出ぬさうぢや。が、脚本は讀むものに非ずの概念から、新人の脚本より、小説の方が金になる。新人は脚本など勉強する閑が無い。芝居の世界は文學の世界よりも技巧的修業の年限がはるかに永い。貧乏人の子供は學校へ上るよりも丁稚奉公を急ぐ。特に此頃のせちがらさでは苦學などもつての他さ。さ、そこで、松竹様にお頼み申すのは、書けさうなと思ふ作家に相當な奨勵學資金を興へることです。勿論登校先は松竹ブロックの劇場とテキストは生きた舞臺と俳優だ。が、此際、所謂文藝部員として諸雜用に過ぎ使つたのでは從來と同様、書け相な才能もいぢけてしまひますわい。

關西における既成作家群を見渡すと

成程いい脚本も出來ぬ筈ぢやわいと思はせる。第一に、小屋敷に比して、何と作家連の顔觸れの寥々たる。如何に一九四〇年型バツカードごと、かうこき使はれては肝腎のシリンダーが蜂の巣もどきに成るのは知れて居る。茂林寺文福、曾我廼家劇、淡海座附の如き思ひつきのニワカ脚本なら、ネタは毎日の新聞から拾へようが、事一度、新派劇壇、若手歌舞伎、大歌舞伎の舞臺となると、それでは估券にかかはりませう。其處で、悲鳴をあげるのが關西在住の作家群だ。食滿南北、大森痴雪の兩先生はどうやら書けねば書けぬで我がまゝの通るお年輩、瀬川春郎、中井泰孝、鳥江鏡也、山上貞一の諸先生は、どうやら年期奉公が未だ大番頭迄は達せぬ中堅野心も有り霸氣も有らうが、それだけに一番引き受けて書きなぐらねばならぬ苦しい此處が土俵

の瀬戸際、書きつくして、年甲斐もなく、ネタの出盡したスタンブ組も無いとは言へぬ此狀勢を、御家の大事の前に、松竹は見通しを極めてござらつしやるのか。たかゞ金魚だ。

傳家の寶劍と迄行くかどうか。専務白井信太郎先生が「新劇壇」を造られた。是ほどの道をどう云ふ具合に歩いて行くか、今の處見透しは利かないが創刊號の脚本欄が相當ツブのそろつて居たのはちよつと斯界の注目をひいたと信じる。お家藝としては上々吉だがさて、活字になつたばかりでは作者は浮べれない。脚本作家は稽古場の場数を踏んで初めてイキを會得するものぢや。改造、中央公論の戯曲がそのまま決して舞臺に乗りかぬる此處のことな

り、机上の空論も同様、疊の上の水練だからちや。其處で「新劇壇」で新人發掘を企圖された白井信太郎先生にのぞむらくは、發掘と同時に、積極的養成の方針を先、お肚にしまつておいて頂きたい。元來此頃の劇壇は、とかく役者の増上慢が流行りものの様に見受けられる。馳け出しの作者では、其才能も意圖する處も認めないのがお偉いお役者衆の心意氣ちや相な。つまりは十有餘年新劇で苦勞した或演出家が價

然色をなして舞臺を蹴つた事件の如き情勢である。が、役者が舊事に戀着して事足りた時代は過ぎた。其現れが新作家を語る聲ではないか。數千の作家希望者の中から浮び上る新人なら、經驗の有無は別として、其處に必ず新しい觀念と様式と方法を持つて居る筈だ。

演劇を殺すものは時流では無い筈ぢや。も少し裏の裏を考へて見よう。幕

内に獅子身中の虫は居らぬか。ほい、役者衆さうむきになつて怒るものぢやない。此處がそれ思案のしどころ、とつくと勘考さつしやれ。此頃の娘は黒髮ぶつくりきつた惜しさは解らぬものぢや。一事が萬事時勢は既に移つて居る。

(七月廿七日誌)

大阪萬朝報

五 郎

義兄十郎の法要

八月歌舞伎座で追善劇上場

七月初旬より巡業の途に登った會我廻家五郎劇は名古屋の公演を打ち上げると八月は大阪歌舞伎座出演と決定したが去月十二日伊勢松坂松坂座に公演、松坂は十郎丈の故郷なので非常な盛況を呈したといふ尙五郎松坂の公演に先立ち一座百三十餘名を引き連れ松坂中町清光寺に實松院安譽祐成居士の墓に參詣懇んな法要を営んだがこの實松院は五郎の義兄十郎の法名で久々の公演に故人十郎の盛大なる法要を営み故人の冥福を祈つたものだ。また八月の歌舞伎座では引き續き十郎追善劇「偲ぶ草」を上場してゐる。因に偲ぶ草は十郎生前のフィルムからヒントを得て新連鎖劇の形式で劇は運ばれるものであると。

松竹過去帳調へに

遺族からの申出を待つ

物故者精靈會の準備進む

今年初めて計畫された芝居王國の大精靈會。明治四十年より今年に到る過去三十餘年間、松竹本社及び各劇場、劇團に所屬した物故者を四天王寺本坊に於て八月中旬の盂蘭盆に追悼するが、昨今松竹多田委員長を始め各委員の手許で、過去帳を繰つて細大洩らさず調査を進めてゐるが、何分にも廣範圍に渉る上に長年月の事としてその調査も目立つたものばかりで、今では遺族の所在すら不明なものがあるといふ始末、この

！よせ讀愛！よ人新
！誌雜本脚の一唯西關

★ 壇 劇 新 ★

各書店劇場賣店に發賣
八月號發賣中
白井信太郎監修

● 錢 十 四 部 壹 價 定 ●

追悼祭に一人でも洩れる事は其意義を失するものとて、此際全遺族から故人の死亡年月、松竹關係當時の職業、遺族の現住所の申出でを待つ事になつた。目下調査済みのものは既に五百餘名に上つてゐるが、少くとも千名以上に上る見込である。

「新劇壇」誌の 劇作研究会

京都と大阪に開催

松竹白井信太郎氏監修の下に發刊された戯曲専門雜誌「新劇壇」は各方面の演劇インテリを刺激し、第一號は好評裡に七月十日發行されたが、この雜誌を中心として京阪神各地に劇作研究團體の結成を見る事となつた。大阪は去る二十一日午後六時半より大阪市南区高津八番町三十三島江鏡也方に於て開催され、京都は京都大學樂友會館に於て十八日午後七時より開催、いづれも熱心な新人の小會にて新作を朗讀、神戸は近く開催する豫定である。

「蜻蛉三人旅」の

記念スタンプ捺印

中座及び市内一流商店で
妹脊氏苦心の漫畫

既報、中座は一日初日梅玉、魁車、長三郎、扇雀、延若等納涼歌舞伎。殊に夏芝居の粹として人氣を煽つてゐるのは、「蜻蛉三人旅」の

● 八月の芝居案内 ●

大 阪		道 角		道 中	
座	舞 伎	座	角	座	中
日 初	日 一	日 初	日 一	日 初	日 一
幕開時	幕開時	演開回	日 二	幕開時	日 一
五時	午後五時	二時	二時	五時	夕
會	會	劇	野	納	納
我	我	一	一	涼	涼
家	家	劇	劇	歌	歌
五	五	劇	劇	舞	舞
郎	郎	劇	劇	舞	舞
第	第	第	第	第	第
一	一	一	一	一	一
バ	バ	無	無	鎌	鎌
ケ	ケ	言	言	倉	倉
ツ	ツ	の	の	三	三
の	の	鞭	鞭	代	代
水	水	一	一	記	記
一	一	幕	幕	三	三
場	場	場	場	幕	幕
第	第	第	第	第	第
三	三	三	三	三	三
草	草	草	草	草	草
三	三	三	三	三	三
無	無	無	無	無	無
言	言	言	言	言	言
劇	劇	劇	劇	劇	劇
悞	悞	悞	悞	悞	悞
ぶ	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ
草	草	草	草	草	草
三	三	三	三	三	三
秘	秘	秘	秘	秘	秘
海	海	海	海	海	海
話	話	話	話	話	話
敵	敵	敵	敵	敵	敵
艦	艦	艦	艦	艦	艦
見	見	見	見	見	見
ゆ	ゆ	ゆ	ゆ	ゆ	ゆ
三	三	三	三	三	三
帆	帆	帆	帆	帆	帆
三	三	三	三	三	三
共	共	共	共	共	共
通	通	通	通	通	通
点	点	点	点	点	点
一	一	一	一	一	一
場	場	場	場	場	場
第	第	第	第	第	第
二	二	二	二	二	二
當	當	當	當	當	當
麻	麻	麻	麻	麻	麻
事	事	事	事	事	事
件	件	件	件	件	件
二	二	二	二	二	二
九	九	九	九	九	九
場	場	場	場	場	場
第	第	第	第	第	第
三	三	三	三	三	三
鼠	鼠	鼠	鼠	鼠	鼠
小	小	小	小	小	小
僧	僧	僧	僧	僧	僧
十	十	十	十	十	十
六	六	六	六	六	六
む	む	む	む	む	む
さ	さ	さ	さ	さ	さ
し	し	し	し	し	し
九	九	九	九	九	九
場	場	場	場	場	場
吉	吉	吉	吉	吉	吉
本	本	本	本	本	本
選	選	選	選	選	選
抜	抜	抜	抜	抜	抜
ま	ま	ま	ま	ま	ま
ん	ん	ん	ん	ん	ん
ざ	ざ	ざ	ざ	ざ	ざ
い	い	い	い	い	い
連	連	連	連	連	連

續篇、三幕十二場であるが「黄門劇」の第二年を祝する意味で、中座では三人旅リレー記念スタンプを作った。このスタンプはこの度上場される十二場を漫画家妹春平三氏が苦心の末圖案化したもので、スタンプ蒐集家は勿論好劇家にも喜ばれるであらう。因にスタンプの捺印は中座及び左の市内一流商店で、三人旅上場中を期間とする由。

(上り)(中座) 1 兵庫(心齋橋川口軒) 2 播州(心齋橋京阪案内所) 3 瀬戸内海(長堀橋高島屋) 4 同海底(安土町ツリリスト・ビュロー) 5 藝備園境(高麗橋西村食料品店) 6 廣島(北濱松本マヌヤフルツ・バーラー) 7 八幡川(渡邊橋ブレイ・ガイド) 8 周防岩國(平野町初田屋) 9 下の關(あべの橋阪和案内所) 10 博多(新世界百足屋) 11 福岡(難波南海ガイド・センター) 12 同馬場先(戎橋佐藤樂器店)

亡父母と亡妻の 石碑開眼供養

五郎が高野山で舉行

八月の歌舞伎座に歸演會我廻家五郎は名古屋打上げ後大阪に引き上げ昨秋亡くなつた妻女の一周忌を兼ね亡父久太郎さんの五十回忌に當るので紀州高野山の山門に石碑を建立、その開眼供養を昨二十五日午後一時より盛大に舉行した。來會者は京阪神劇文壇の名士を始め自井松竹會長同專務多田常務に松竹關係者、芝居茶屋、及び京阪神三都の花柳界の人々等三百餘人に達した。因に新しく建立された石碑は山門一の橋、尙當日の導師は高野山普賢院住職森寛澄、協導師無量光院住職廣井觀梅及び南院住職寶衆院住職に山外は大阪四ヶ寺、兵庫一ヶ寺等に式衆三十人にて盛大を極めた。

衛 生 錠 口 中 殺 菌 劑

力 大 一 丸

本 舖 安 藤 井 筒 堂 藥 品 部

◆ 編輯後記 ◆

村上勝

◇物凄い暑熱だ——煽風機、電話のベル訪問者、そうして暑さだ。今月號は、事務所で編輯が出来なくつて、家へ原稿一切を持歸つて、茲にどうやら、御覽の如きものを作りあげた。

◇特別讀物には、高安先生、高原慶三氏、高谷伸氏などが録三に就いて寄せられ、軽いものには、巡業地の多忙ななかを割かれて、五郎氏、小次郎氏が寄稿され、都築氏は、例の情歌讀物をおくられたお禮を申し上げます。

◇その他、扇雀氏の『私と三浦之助』、菱田、森、桂田、渥佐氏の梅、魁、延の『トリオに寄す』、食滿氏の新作舞踊に就いてなど、本誌八月號を彩る讀物揃ひである。

◇けふ——各座は一齊に初日をあげた。

中座は『黃門劇』等上場の納涼歌舞伎で關西精銳の總動員、五郎劇は久々に歌舞伎座へ歸演『敵艦見ゆ』『偲び草』他に三篇を上演、七月英氣を養つた關西新派は南座へ進出、浪花座で六七の兩月壓倒的好成績を示した、關西花形歌舞伎は、神戸松竹劇場へ躍進した。各劇團各劇場とも暑さをK.O.する意氣である。

◇九月——次號はシーズン来る!!で編輯部も更にピツチをあげる筈である。編輯者の何時に變らぬ言葉であるが、御期待下さい。

◇先月號でもお寄せした脚本雜誌『新劇壇』第二卷八月號も本誌と同日頃に各書店に出る筈である。共に愛讀を希ひます
◇連日の酷暑——皆様の御自愛を祈ります。(八月一日)

昭和十年八月一日發行
月刊『道頓堀』第十年
第百七號

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社
大阪府北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢 (郵錢五厘)

昭和十年八月一日發行
昭和十年八月一日發行

大阪府南區難波新地三番町

(大阪歌舞伎座内)
松竹興業株式會社大阪支店

發行所 松竹興業株式會社大阪支店

共同編輯 山本 上江 眞也
印刷所 道頓堀社印刷部

大阪府南區難波新地三番町
(大阪歌舞伎座内)
松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

あぶら取紙始礎 添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉 スキナ石鹼

專斷特許 常用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商録登



大 阪
發賣元 朝日堂株式會社

大 阪
本舖 中田スキナ屋謹製



雪之囃変化二篇

大阪朝日新聞連載
松竹キネマ京都撮影所超特作

三上於菟吉 原作
衣笠貞之助 監督

林長二郎 二役 主演

嵐 德三郎 特別

高堂 國典 出演

伏見 直江 出演

他 下加茂

オール・スターキヤスト



昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十年八月一日發行
每月一回
一日發行

「道頓堀」第七七輯 第十年 八月號

一部 金參拾錢